

日 時 令和 6 年 2 月 14 日 (水) 午後 2 : 00～
場 所 全員協議会室

令和 5 年度第 8 回市政モニター会議 議 事 録

○司会

本日は、お忙しい中、御出席いただきまして、ありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまから、第8回市政モニター会議を始めます。

初めに、高橋靖水戸市長から御挨拶申し上げます。

○高橋市長

皆さん、こんにちは。

第8回市政モニター会議に出席いただきまして、本当にありがとうございます。

また、皆様方には、この1年間、市政モニターとして様々な視点に関心を寄せていただきながら、研究、研鑽を重ねていただいて、今日は提言書もいただけるということなのですが、内容が大変充実したものとなっているということで、皆様方のこれまで1年間の御努力に心から敬意と感謝の意を表したいと思います。

中身はしっかり精査をさせていただきますが、もちろん全部すぐやるという大風呂敷は広げません。やれるもの、やれないものが出てきますから、よく精査をさせていただいて、すぐできるものはすぐやる。時間がかかるものは皆様方にきちんと説明をしながら、どのような経過、スケジュールでやるかということを説明させていただきます。場合によっては、少々加工をさせていただくものもあれば、もっともっとブラッシュアップをしなければならないというものも出てくるかもしれません。

いずれにいたしましても、中身は、市民の代表として、皆様方に1年間いろいろと研究していただいた成果でありますから、しっかり受け止めていきたいと思っております。

今日もこれからプレゼンをいただくわけなのですが、皆様方の年代的に、子育てに関するプレゼンも多いと伺っています。こちらのほうも楽しみにいたしております。

御承知のとおり、水戸市も令和6年4月から第7次総合計画が始まります。市議会においても、特別委員会は無事通ったということでもありますので、本会議でも了承いただいて、4月1日から始められるかなと思っています。

特に3つの柱を据えさせていただいて、これは皆さんにも説明があったと思いますが、子育てしやすいまちをつくっていきこう、あるいは、安全・安心、これは福祉とか医療とか、防災・減災というもののなのですが、あとは経済をしっかり回していこうという三本柱を据えさせていただきます。

そういった中でも、人口減少、超高齢社会の中で、子育て支援、教育の充実を図って、できるだけ若い人たちから選ばれるまちにしていきたいという思いを政策の一丁目一番地として据えさせていただきました。

ただ、一方で、全てそればかりをやるというわけではありませんので、高齢者福祉であるとか、障害者であるとか、様々な福祉政策もやっていかなければなりません。

先日もある女性団体の会議に呼ばれて、話をしてくれと言われたものですから、この一丁目一番地の子育て支援の内容を中心に話をしたところ、結果、最後には、アンケートに「高齢者のことももっとやれ」と書かれました。前段に、今日は子育ての話をしますが、高齢者福祉をやらないわけではありませんから、それはお含みおきいただいて聞いてくださいと言ったにもかかわらず、最終的には、水戸市は、こどものことばかりで、高齢者のことは無視するのかと、結局その旨が書いてあるというようなことがありました。説明責任というのは

もっとももっとしっかりやらなければならないなということを改めて実感させられた一幕でございました。

そういうことで、子育て支援等を強力にやっていくため、既に令和5年の4月から、特に、経済的負担の軽減として、中学生の給食費を無償化したりとか、あるいは、小学校、中学校の入学のお祝い金を支給させていただいたりしています。あるいは、相談・支援体制等も強化をさせていただき、また、令和6年の4からは、こども部内に「こども家庭センター」を設置して、あらゆる相談・支援を可能な限りワンストップでやっていこうということで、そういう体制も整える方針を、議会でも答弁をさせていただいたところであります。

今までは、経済的負担の軽減とか、あるいは相談・支援体制の強化とか、二本柱でいたのですが、新しい総合計画の中では、それに1つ加えて、こどもたちの活動・活躍できる場をつくるという三本柱にしました。どちらかという、今までの2つは親目線だったものですから、こどもたち目線で考えたときに、こどもたちが伸び伸びと、そこで自主性を磨き上げながら生きる力を育んでいく、そういう居場所をしっかりとつくっていこう、活躍・活動できる場所をつくっていこうというのをもう一つの柱に据えさせていただいて、三本柱で子育て支援をやっていこうということを盛り込めさせていただいたところであります。そういうところは今日の皆さんのプレゼンと通じるところもあるのかなと思っています。

ただ、まだ私も始まったばかりでありますので、今日の皆さんのプレゼンも参考にしながら、どういう切り口で進めていくのか、どういうふうな優先順位をつけて実施をしていくのか、どういうスケジュール感を持ってやっていくのか、あるいは、どういう財政規模でやっていくのか、そんなことをよく精査をしながら進めていければと思っています。

また引き続き、皆様方にもいろいろな御意見をいただきたいと思っています。

まず、冒頭、このぐらいの挨拶にさせていただいて、あとはいろいろと皆さんとごつくばらんにやり取りをさせていただきたいと思いますので、御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

それでは、お世話になります。よろしくお願いします。

ありがとうございます。

○司会

ここで、水戸市の出席者を紹介させていただきます。

市政モニター担当部署である、市長公室みとの魅力発信課長ほか、市民相談室一同でございます。

また、市政モニターの皆様の御提言に関わる関係各課長等も同席させていただいております。

出席課名につきましては、お手元の座席表を御確認ください。

市の出席者は、以上でございます。

よろしくお願いいたします。

続きまして、市政モニターの皆様が作成した提言書を、代表の市政モニターの方から、高橋靖水戸市長へ提出していただきます。

○市政モニター代表

私たち市政モニターは、「水戸市の移住・定住促進のまちづくり」をテーマに定めて、こ

の1年間、研究してまいりました。

その結果、「インクルーシブでHeartfulな水戸」、「住みつづけたくなる水戸」、「日本で一番輝くまち水戸」という3つを指針としてまとめてきました。

この3つの指針を具体化して、多くの方から選ばれる水戸市をつくるための意見を、今回、この提言書として作成させていただきました。

今回、この時間で私たちが作ったこの提言書についてプレゼンさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私たちが作ったこの提言書が、少しでも今後の水戸市のまちづくりに役に立てば幸いです。と思っていますので、よろしくお願いいたします。

〔提言書手交〕

○高橋市長

皆さん、ありがとうございました。

○司会

それでは、ここからは、市政モニターの皆様から、高橋靖水戸市長に対して提言の発表を行っていただきます。

発表の順番は、提言書の記載順で、小テーマである「インクルーシブでHeartfulな水戸」、「住みつづけたくなる水戸」、「日本で一番輝くまち水戸」の順に行っていただきたいと思います。

なお、発表時間を一定程度過ぎた場合にはベルを鳴らせていただく場合がございますので、そのときには発表をおまとめいただければと思います。

それでは、「インクルーシブでHeartfulな水戸」に関する御提言について、順に発表していただきます。

「インクルーシブでHeartfulな水戸」の皆様、お席の移動をお願いいたします。

こちらをお願いします。

○発表者 1

では、「インクルーシブでHeartfulな水戸」、【提言 1】「みんながつながれて、みんなが活躍できるまち」について発表をいたします。

提言書の18、19ページになります。

この提言が理想とするまちの姿は、多世代の市民同士が交流を行う拠点である「(仮称)ハーモニー広場」が市内の中学校区に1つずつあります。また、このまちには、市民同士で互いに助け合いやすいように、「(仮称)みとちゃん困りごと」という助ける人と助けられる人をつなぐアプリがあります。

水戸市民は、「皆でいきいきと生活する」、「自分の特技を磨き、周りに活かす」、「皆で助け合い、支え合う」という考えが共有されており、ハーモニー広場等で自分らしく自己表現できる文化芸術活動等をするとともに、上記の仕組みを活用して、それぞれの困りごとを持ち寄り、互いに相手の役に立とうとする活動をしています。

このように、まちが文化芸術で彩られ、市民同士が温かく支え合い、地域としての一体感のあるまちは、都心ではなかなか経験できず、一生涯住みたいと思えるまちとなっているため、移住・定住が促進されます。

このまちの魅力の一つは、「人の役に立っていると実感できるまち」であり、ここではこれを1つ目の目標とします。

この目標達成への課題は、困っている人と助ける人がつながるために、周りにヘルプを伝える仕組みをつくることです。

その課題解決の取組として、「(仮称)みとちゃん困りごと」というアプリを開発します。

私は、実家が遠方であり、かつ、2人のこどもを育てる働く母親という立場で、この地域で気軽に頼れる人や場所があればいいと思い、今回、提言させていただきました。

困りごとは、その人の事情や環境によって多種多様です。本当に短時間でも助けてほしいと思っている方は多いと思います。

私は、なかなか人に頼ることができなかったので、少しでも困りごとを多く持つ人が減らせればと思います。

ここでは、困りごとや助けてほしいことを上げ、それを助ける人たちをつなげます。

同じ幼稚園や小学校など、所属しているカテゴリごとにグループ分けをします。グループ分けをするのは、顔見知りや事情を分かっているほうが安心して利用しやすいと考えたからです。

次に、このアプリの概要を説明させていただきます。

内容としては、家の掃除、こどもの送迎や預かり、病院の付き添い、買い物の支援、親のリフレッシュ等があります。あるときは助ける側になり、困ったときはお互い様になっております。

金銭の負担をしてもらい、助ける側に責任を持ってもらうことにします。

支援を求める人だけではなく、支援をする人も利用者として登録をしてもらいます。

利用者間での情報共有がされることで、困りごとの可視化をします。

行政が有料サービスとして運営・管理することにより、一市民の困りごとを支援策の立案につなげてほしいと思います。

来月、私の娘が幼稚園を卒園するのですが、その日は年長以外のこどもは休園となり、年長以外こどもを持つ親にとっては、休園するこどもの預け先に苦慮をするということを聞きます。近くにお願ひできる祖父母がいる方はいいですが、それができない親はどうなるでしょうか。親は、卒園式に参加するまで、気苦労が絶えません。

最近では、感染症で急に学級閉鎖になることも多々あります。こどもが体調不良になれば違いますが、元気な場合、仕事を休み続けるわけにはいきません。一社会人として仕事も大事です。

社会全体、行政がこのような問題に向き合い、親を支え続けなければ、こどもを増やすことはできませんし、定住して働き続けようと思いません。親だけが息苦しい、辛いと思います。この仕組みで、親が少しでも希望を持てたらと思います。

開発に当たって、「メイアイ」というアプリを紹介させていただきます。

こちらは、高齢者や障害者、旅行者など不特定多数を対象としていますが、助け合いアプリとして既に様々な行政と連携をしております。

次に、類似のアプリとして、もう一つ、紹介させていただきます。

こちらは、子育てシェアのアプリとして、お下がりやお裾分け、貸し借りができる物のシェア、御飯やお出かけに誘ったりする事・予定のシェア、習い事の送迎や急な残業・出張時の託児をする送迎・託児のシェアがあります。こちらは知り合いの人だけがつながるものとなっております。

2つ目の課題は、困っている人と助ける人がつながるために、誰かの役に立とうとする意識づくりを行うことです。

たとえ仕組みが整備されても、困っている人を手助けする人がいなければ成立しません。そのため、仕組みや認知度を広げる必要があります。

SNSなどで周知をし、手助けする人が自分でもできるという自信を持ってもらえるようにします。

活動内容の様子や登録方法が見える化し、イメージしやすくします。

また、空き時間や自己啓発としてスキルアップもできることもアピールできればと思います。

これで、私の発表を終わりにします。

○発表者 2

2つ目の目標は、「孤立を感じず、一生涯住みたいと思えるまち」です。

お手元の資料は、20ページを御覧ください。

まず、ここでの孤立は、スライドにあるように、直接会ったり話したりするなどの対面接触や、メールや電話、ラインなどの非対面接触など、家族や友人、近所の人との接触が週に1回未満の状態を指します。

このグラフは、ある首都圏の都市の性別、世代別に見た社会的孤立状態を示すものです。男性が多く、中年層から高年層で多いことが分かります。

また、ここには示しておりませんが、孤独、孤立の実態把握に関する全国調査での孤立感では、50歳男性が7.3%、30代女性が7.9%で、高い結果でした。

原因は、家族の死別や病気、けが、独り暮らし、人間関係によるトラブルなどが上位に挙げられています。

さらに、孤立を感じる人で、実際に行政機関などからの支援を受けていない人は88.2%という結果でした。

それぞれの世代において課題があり、孤立となる原因があります。

核家族が増えたことや共働きが増えたことは言うまでもありませんが、それにより近隣住民との接触もなくなり、ささいな困りごとの解決が難しかったりコミュニケーションが取りにくかったりしているのが現状だと思います。

私の周囲でも、子育ての悩み、また、子育てが終わった親世代の悩みが聞かれます。気軽に頼んだり聞いたりするところ、そういう人がいたらというのが共通の声でした。

また、私は、普段、病院で勤務しておりますが、入院されてくる方の多くは、家族が近くにおらず、身の回りのことに困っていたり不安があるとおっしゃっている方が多くいます。わざわざサービスを使ったりするほどでもないし、よく分からないということをよく耳にします。

そこで、お互いに助け合う機会をつくれないかと考えました。

若年層にも高齢者層にもお互いに強みや弱みがあり、それをお互いに達成することが生きがいになると思います。

先ほど述べたように、孤立を感じていても、なかなか頼ることに抵抗があったり、そこに行き着けなかったりすることが多いと感じます。

そこで、規模を小さくし、気軽に交流でき、互いの顔が分かり、参加しやすいイベントの開催を支援するという課題を挙げました。

取組としては、お手元の資料の右側にあるような活動や支援を挙げています。

ここでのポイントは、地区により年代が異なると思われるため、ニーズに合わせたイベント開催が必要であると考えます。

例えば、「スマホやパソコンの使い方をちょっと聞きたい、頼りたい」というニーズの場合、身近にスマホやパソコンを得意とする若者世代がここで活躍できるというわけです。

また、「健康のために運動をしたいけれども、1人ではどうしていいかわからない」、「ジムに行ったり、大きな場所には行きにくい」などの悩みに対しては、体力測定やヨガ、介護

予防体操などのイベントを開催します。

手作り玩具などの作成では、インターネットに頼らず、ものづくりの楽しさを感じたり、試行錯誤して作ったり、協力し合うことなど、高齢者がこどもたちに教える機会など、大変貴重になるかと思います。

また、高齢者が多いところでは、自らアクションを起こしにくいことが予測されるため、実際に自宅を訪問したり、ヒアリングをするなどの対応が必要と考えます。

参加してもいいかなという規模かつ集いやすい空間・機会を提供することで、安全・安心という心の支えになり、交流や居場所ができ、何かあったときにはお互い様という関係が構築されると思います。

そのことが孤立をなくし、災害や病気のときにも備えやすい環境がつかれるのではないかと思います。

私の発表は、以上です。

○発表者 3

提言書の21ページを御覧ください。

「F o r y o u」精神で温かく支え合い、言葉を越えた様々な表現方法で多様な人々が交流し、心動く体験ができる第三の居場所があることが私の理想とするまちの姿です。

このまちをつくるために、この提言で実現したいことは、「まちが文化芸術で彩られて表情豊かになること」です。これを3個目の目標とします。

実現に向け、以下のとおり、課題及びその解決への取組を提言します。

市民が文化芸術活動をしやすい環境にするため、身近なところに特技を活かせる場をつくります。

市内の中学校区に1つずつあり、市民同士が交流できる「ハーモニー広場」。民間施設は場所が限られている上に、利用料金も発生してしましますが、このハーモニー広場は利用料はかからず、誰でも気軽に利用することができます。

特技を活かせることにより、他者との共感の輪が生まれ、文化芸術活動がしやすい環境になっています。

ここには自由に使えるピアノやギター、世代を問わず人気のウクレレ、自作もできる楽器カリンバ、たくさんの人気曲が詰まった歌本などが置いてあります。

木を豊富に活用した木のぬくもりと自然を感じられるつくりの空間の中で、五感と響き合う感性を芽生えさせるだけでなく、自分と向き合う時間も増やし、新たな自分を発見することができます。

人が一生の中で最も多く会話をする相手は、自分自身の心だと私は思います。自分を大切にし、優しさや思いやりを持ち、身近な人々とのつながりを深めることで、第三の居場所で心地よく過ごすことができます。

市民の文化芸術活動が活発に行われるようにするため、活動に参加したくなるきっかけ、そして、通いたくなるきっかけづくりをします。

市民センターにある楽器などを活用した展示会、演奏会を市内小中学校で開催します。

実施に当たり、市民の中から演奏可能な講師役を募集し、音楽の授業と連携して充実させます。

感動を伴う体験が記憶として残りやすい子どもたちが楽器に触れたり、子どもたちに生演奏を届けたりすることで、皮膚感覚として経験できる直接体験の場を増やします。

言葉以外の表現方法で楽しさや喜びを分かち合うことができ、心動く体験を通じて、創造性や共感力を育みます。

これは豊かな人生を築くことができるだけでなく、人とのつながりや社会への貢献、まちのイベントにも意欲的に参加することが期待できます。

私自身、大人になった今、ふとしたときに小さい頃の思い出がよみがえることがあります。それはとても幸せなもので、うれしさが心が満たされます。感情と結びついた記憶と特別な経験は生きる力にもつながるのだと実感しています。

音楽がもっと身近なものであってほしい、その思いから、飛び入り参加もできる音楽イベント(オープンマイク)を市民センターで開催します。

海外発祥のこのイベントは、予約不要で、会場に来た順にエントリーをしていき、人前で演奏や朗読、ダンスなどを自由に表現、披露することができます。

開催に当たっては、イベントを盛り上げるために、人前で話したり楽器伴奏ができる方を進行役(ホスト)として配置します。

感情を音楽で自由に表現することができ、互いに共感できる経験を繰り返すことで、多様な価値観を知り、理解を深め、貢献できることを実感することで自己肯定感が高まり、自信と誇りにつながります。

これらのことにより、イベントの後も文化芸術活動に参加、そして、通いたくなる気持ちを高めることができます。

温かく支え合い、心動く体験ができる第三の居場所があることが基盤となり、まちが文化芸術で彩られて表情豊かになること、3個目の目標が実現します。

「みんながつながれて、みんなが活躍できるまち」、以上で、提言1、私たちの発表を終わります。

御清聴いただき、ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。

続いての方、発表をお願いいたします。

○発表者4

私は、兵庫県姫路市から水戸市へ移住して5年目になります。

中1の娘と水戸特別支援学校へ通う小学5年生の息子の母親をしています。

私の提言なのですが、障害児・障害者も安心して生活できる水戸市ということで、提言書の7ページ、施策は22ページになります。

以前住んでいた姫路市と比べて、水戸市に来て、私はすごくがっかりしたことがたくさんありまして、その点を踏まえて、今回、市政モニターに応募させていただきました。まず、水戸特別支援学校というのは肢体不自由の学校なのですが、うちの子の学年だけではなくて、ほかの学年もそうなのですが、水戸市に住んでいる人がすごく少ないなという印象がありまして、なぜわざわざそんな遠くから通っているのだろうと思っています。通学にかかる時間って、毎日のことですからすごく大変だと思うのです。なのに、なぜ水戸市に住んでいないのだろ

うと思ったときに、福祉の充実を考えて、地元とか親に頼らないと障害児の生活はできないので、そういったところも大きいのかなと思い、もっともっと水戸市の福祉が充実すれば、みんなこの市を選んで引っ越してくるのではないかなと考えます。

私も実際に障害児を生んで思ったことは、すごく孤独感が強かったことです。そういったときに、姫路市のルネス花北という施設があるのですが、そこを紹介されて、私は本当に救われました。水戸市にもこのルネス花北のような施設ができれば、もっともっと障害児が暮らしやすいまちになるのではないかなと思いました。

ルネス花北というのは、22ページを御覧いただければ分かりますが、PT、OT、ST、医師、看護師、保育士が連携した総合福祉通園センターとなっております。

PT、OT、STについては、資料につけております。そちらで御確認ください。

このルネス花北なのですが、敷地内に、病院、リハビリ施設、療育があり、療育に関しては、肢体とか自閉とかの障害の種別に関係なく行っております。

あと就労支援ということで、洗車のサービスとか野菜の水耕栽培とかがあり、そちらで働く方もいらっしゃったり、あとは生活介護、敷地内には障害者の体育館とか温水地下プール、園庭。

療育の子に向けて、市内をバスが巡回しております。

そういった全て揃った一体施設で、経営も市が運営しているので、安心していただけることができます。

そこでは、週1回の母子通園や療育が行われており、親の心のつながりとか情報を得ることができて、そのままそのメンバーで進学するので、安心した学校生活を送ることができます。

そういった施設ができればいいなと思っています。

また、障害児の余暇活動なのですが、せっかく千波湖の花火大会に、障害児は、駐車場の問題とか、音が苦手だとか、そういったことがあって、私も息子をなかなか連れて行けないので、障害児に向けた施設の開放、障害児だけを集めて、そこで見られるような環境があれば、もっと見せてあげることもできるなと思っています。

ほかにも、動物園なども、障害児だけの無料開放デーがあったりとかするので、そういったところもやっていただければ、もっともっとこどもたちにそういった体験をさせてあげられるなと考えております。

なかなか難しいとは思いますが、せっかく県庁所在地ですので、水戸が変われば県全体が変わるのではないかなという期待も込めて、心のバリアフリーにつながるようなまちづくりを提言いたします。

以上です。

御清聴ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。

では、続いての方、発表をお願いいたします。

○発表者5

提言書の8ページを御覧ください。

こどもの多様な学びの機会と、それを支える大人の拡充ができた水戸市を提案させていただきます。

私は、水戸市出身で、大学までを水戸市の実家から通い、茨城県の教員採用を受け、日立市で学校の教員として働いていました。

結婚を機に、住まいを水戸市へと戻し、現在は退職しています。

生まれ育った水戸市が、他市町村よりも教員にとって働きやすいまちにできないかなと考えて、市政モニターに参加しました。

茨城県も今年度、鬱病など精神的な病気で休職した教員が過去最多となりました。この環境を変えるための理想のまちとはどのような姿でしょうか。

提言書23ページを御覧ください。

私が理想とする水戸市は、学校施設という箱にとらわれず、まち全体で伸び伸びと学んでいける環境が整っています。

また、教員にゆとりがあるので、きめ細やかな学級運営が可能であり、教員も生徒も多様な価値観に触れる機会があります。

そうすることで、こどもの教育に関心の高い親たちから選ばれる水戸市となり、移住・定住が促進されると考えます。

このまちの魅力の1つは、教員が生き生きと働けることであり、これを目標としています。

目標達成への課題は、次の2つを挙げさせていただきます。

まず、勤務時間に合った仕事量にするため、クラス担任にかかる負担を減らします。

勤務時間に合った仕事量にするために、担任、担任外のサポートの先生、特別支援の先生、それぞれの在校時間などのグラフも載せています。

授業だけではなくて、朝の会に始まり、児童生徒の心のケア、問題行動に対しての生徒指導、不登校生徒の対応など、朝から晩まで休憩時間もなく働いています。

そこで、全員担任制の導入を検討していただきたいです。全員担任制とは、負担の大きい担任業務を学年というチームで請け負うことで、個々の負担を軽減する取組であり、現在、茨城県内でも取手市で実施されております。

私が実際に日立市で教員として働いていて、担任と担任外と呼ばれる教員は目に見えて仕事の量が異なりました。担任にしか許されない校務分掌などもあり、学年全体で仕事の多さに悩んでいました。チームで請け負えれば、みんなで早く退勤することが可能になるのではないのでしょうか。

2つ目の課題は、担任業務の中でも、特に最近増加傾向にある不登校生徒の対応を減らすことです。

私の勤務していた中学校でも、不登校対応と一口に言いますが、5パターンほどありまして、それらを担任中心に学年の複数人の教員で行っていました。

そこに対して、スクールカウンセラーだけではなくて、ソーシャルワーカーなど、より専門的な人材が教員をサポートする体制を整えてほしいです。

そもそも増加傾向にある不登校とはどのようなものなのでしょうか。不登校とは、病気や経済的な理由を除き、1年のうちに30日以上学校を休んでいる状態のことです。

この画像は、令和6年の1月27日、NHKで実際に放送された不登校についての特別番組

から引用しました。増加する不登校について、関心が高まっていると感じます。

そして、不登校は、大前提として、問題行動と判断してはならないと定義されており、現在でも学校という仕組みにとらわれて苦しんでいる家庭が多くあると感じます。

文科省が調査した不登校児童生徒数の推移を見ると、10年連続で増加しているのが見て分かります。

水戸市でも、令和2年から3年連続で増加傾向にあり、小中学校合わせて800人を超えています。

コロナ禍もありましたが、そもそも学校の仕組み自体を見直す時期にあるのではないのでしょうか。

こちらは、不登校児童生徒を持つ親への全国アンケートの結果をまとめたものです。右上を見ると、親と接する機会の多い教育委員会や役所の窓口、担任の先生などが役に立たなかったと答えた数値が7割を超えています。左下を見ると、圧倒的に自宅で過ごしている子どもが多く、経済的な理由やフリースクールの少なさから、自宅にいることが多いことが読み取れます。

行政を相談先として頼ってもらうために何が必要でしょうか。ぜひ学びの多様化に対応した学校を水戸市へ置くことを御検討ください。

一般の学校と同じく、卒業資格を得ることが可能であることが最大のメリットであり、2027年までに全都道府県への設置を文科省は目指しています。

こちらは実際に札幌市内に置かれたところで、関東の地域から引っ越してきた例もあるようです。

教員も子どもも、毎日笑顔で過ごすために、多様な学びの機会と、それを支える大人の拡充を進めていただきたいです。

これで、私の発表を終わりにします。

御清聴ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。

続いての方、発表をお願いいたします。

○発表者 6

私の提言は、25ページです。御覧ください。

私は、子育て支援センターで保育士として6年働いております。

保護者と関わって必要だと思ったことを、今回、提言として発表させていただきます。

子育て世代に寄りそい一緒に子どもを育てていくまち。

近年は、親になって初めて子どもと関わる方が多いです。妊娠中、出産後に対する不安やトラブル、育児への心身的負担、保育園入所の手続の方法や情報収集の難しさ、移住・定住をすると周りに子育てを頼れる人がいないというのが個々の大きな問題のところだと思います。

理想のまちの姿として、この不安や負担が大きい時期の子育て世代に寄り添い、施設や支援などを活用して困りごとを解消するなど、まち全体で家族のように協力して助けることで安心して子育てができると思ってもらえる。そうすることによって、水戸市の移住・定住が

促進されていくと考えます。

まず、1つ目の課題は、産後期の母親の体調不良を防ぐために、体を休める時間を増やすというものです。

取組が2つあります。

1つ目は、産後ヘルパーの事業者及びその利用者に補助金を交付すること、もう1つは、妊娠中から産後半年の間、第1子等を持つ親は保育園に未就園児を入園させることができるようにするというものです。

これを利用することで、妊娠中、産後期の体調不良の母親の療養をできる時間をつくることができます。また、母親が緊急入院など不測の事態のときにも、近くに預け先がないという場合でも、父親などの就業の助けにもなるということがあります。移住者のように、身近に頼る人がいない方に効果的と考えます。

2つ目は、乳幼児期に親が心身に余裕を持って育児ができる生活を送るための支援を充実する。

取組として、未就園児1人当たり3枚程度、一時保育を無料で利用できるチケットを配布します。

一時保育を利用することで、自分の家事や休息の時間を確保できるため、育児に向けた心身の余裕を持つことができます。

子育て支援施設等につながりを持つことで、子育ての孤立化を防ぎます。

26ページにも載せました資料のように、自分の体のトラブルや体の疲れ、自分の時間がない、家事が思うようにできない、そういったことを解消できると思います。

もう一つの課題は、乳幼児期に親が社会的な生活を送るための養育の不安や負担を解消するというものです。

こちらも取組が2つあります。

1つ目は、市役所で保育園申請等の説明会を月1回程度実施するというものです。こちらには、託児サービスがつくとなおよいと思います。

2つ目は、保育園入所に当たって、兄弟が同じ保育園に通える制度をつくる。こちらは京都市に事例があります。

これによって、情報が得やすくなるために、養育の不安が解消され、社会復帰の準備を進めることができ、通園準備の負担が軽減され、兄弟を別々の保育園に通わせるときに生じてしまうこどもの車内への置き去り事故等を防ぐことができると考えます。

以上が、私が働いていて、保護者たちに必要とされていたことです。

水戸市を選べば家族で安心して過ごせる、住んだ後にここでよかったと思ってもらえるような、県都としてふさわしいまちになることを期待しています。

御清聴ありがとうございました。

○司会

以上、「インクルーシブでHeartfulな水戸」に関する提言の発表でした。

ありがとうございました。

○司会

ここで、発表を基に、高橋靖水戸市長と懇談をしていただきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

○高橋市長

ありがとうございました。

いろいろと私の知らないこともたくさん教えていただきまして、ありがとうございました。

また、ちょっと気が付かないこととか、配慮不足だったところもあるのかなということを反省しながらも聞いていました。

それよりも何よりも、皆さんのプレゼン能力がすごいなということを、今、しみじみと感じながら聞いていました。

冒頭、アプリの提言の件で、皆さんにお伺いしたいことがあって、アドバイスをいただければと思うのですが、若い方々の感性、考え方、要はこれはコミュニケーションの問題だと思うのです。この発表の中で、地域とのコミュニケーションが希薄になったとか、核家族化になっているからということがあるのですが、ある意味、若い人がそれを選択しているところがあると思います。例えば、町内会には入りたくないとか、親とは住みたくないとか。そのことが孤立孤独につながったり、町内会で助け合うことの希薄化が助長されることになっているのですが、既存の人間関係はよろしくない。でも、アプリの中で新しく作り上げる人間関係とか、そういうところだったら受け入れられるというところなのではないでしょうか。

今、悩んでいるのは、実は、水戸市も町内会の加入率が52%になってしまっていて、半分が町内会には入っていないのです。話をいろいろ聞くと、近所付き合いは面倒くさいとか、町内会長が回ってくるのが嫌だとか、ごみ当番をやりたくないとか、いろいろなことは聞くのですが、そもそもいわゆるオーソドックスな既存のコミュニティーとか人間関係ではないコミュニティーを若い人たちというのは望んでいるということなのではないでしょうか。

私たちはどうしても町内会を何とかしようというところにこだわっており、市議会からも、とにかく町内会の加入率を何とかしろということで、みと町内会・自治会カードなどを発行して、カスミなどの協力店に行ったら5%割引になるですとか、町内会に入っている人に限ってそういうカードを支給したりもしているのですが、そういうところの皆さんの感覚というのを教えていただいて、今後の施策に生かしていきたいと思います。

例えば、ファミリーサポートはアプリとかではなくてアナログでやっているのでしょうか。子育ての人と、サポートする側とサポートを受けたい側の状況って、どうなっていますか。

○こども政策課

ファミリーサポートセンターにつきましては、利用を希望する方、利用会員と呼んでいますが、そちらと、協力会員といいまして、サービスを提供する方をマッチングさせるような取組となっています。

現状は、市長が今話されたように、申込み等についてはアプリなどができていない状況ですが、サービスとしては、こどもの送り迎えとか、先ほどお話がありました、ほかの兄弟の学校行事のときの一時的なお預かりとか、そういったサービスは提供しているような状況です。

○高橋市長

アプリではないですが、そういうこともやっています。

今後、デジタル化の社会の中で、こういうときにアプリでマッチングしてお互いに助け合ったほうが、それはそれで今のアナログよりも幅は広がるのかもしれないですね。これは研究してみる余地はあります。

隣近所が希薄化している状況は何とかなければならない。孤立・孤独がある。そういうことを感じている人がいる。でも、それは今の若い方々の選択の結果でもあったわけですね。町内会には入りたくない。では、改めて、町内会に若い人たちが入ってくれるにはどうすればいいのかとか、そもそも町内会という既存の団体ではなくて、違う形のコミュニティー、アプリの中でマッチングさせるとか、助け合うとか、もうそういうことにシフトしていったほうがいいのか。私たちも町内会にこだわって、そこにお金をかけていますが、そういうことよりも別なコミュニティーをつくるほうが優先されるのかなと、今、話を聞いていて思ったりもしたのですが、どうでしょうか。発表されてない方からでもいいですが、若い方々の新しいコミュニケーションって何なのかということ。祭りなどを一生懸命やっている方もいらっしゃるではないですか。あれとかも昔からの既存のコミュニティーではないですか。どういうコミュニティーだと、孤独・孤立を感じないで、みんなで助け合うという仕組みになるのか、若い人たちの感覚を聞きたいなと思います。

○市政モニター

高橋市長とは前からいろいろなところでお会いしているので、市長も御存じいただいていると思うのですが、今、発表いただいた皆様の内容とはちょっと異なるかもしれませんが、市長のおっしゃられた既存のコミュニティーと、今の若い人がどうすればいいのかというところで、例えば、既存のコミュニティーでも、今の若い方が入りたいと思うようなコミュニティーはあると思います。

例えば、僕は、市長がおっしゃったように、水戸黄門まつりにずっと参加したりしているのです。それ以外にも、水戸青年会議所でちびっ子広場というイベントを毎年5月に千波湖でやったりとか、地域のいろいろなイベントをやったりとか、コミュニティー自体はいろいろなところにあります。

あとは、例えば、水戸黄門漫遊一座さんとかがやられていたりすると思うのですが、いろいろなコミュニティーがあるのですが、今の若い人たちが入ってもいいなと思うコミュニティーがあったとしても、その出会い方というのは、既存のコミュニティーって、リアルで誰々さんを知らないと入っていけないのです。リアルで誰々さんを知っていれば、その人から紹介してもらって、すぐに入れるのだけでも、その誰々さんに会うのにはどこに行けばいいのかがどこにも書いていないのです。

僕たちはロールプレイングゲームをやっているわけではないので、洞窟まで行って、物知りじいさんを探して、そこへ行ったら、天国への船のチケットが買えますとかという話ではないですよ。アプリでさくっと探して入れればいいのですが、そういう意味で、既存のコミュニティーを新しくする必要はないのかもしれないけれども、入り方というのはデジタル化する。そこで若い方にちょっと歩み寄るというのは必要なのではないのでしょうか。そのミスマッチというのはあるのではないかなと思います。

○市政モニター

私の実家が水戸市の見川町にあって、おばあちゃんの世代からその実家で過ごしていたので、近所の方も顔見知り、子ども会といえば廃品回収でというところで、町内会、子ども会にすごくお世話になりました。

今、自分が住んでいるのが内原町ということで、少し外れたときに、顔見知りのおじいちゃん、おばあちゃんなら恐くなくて、挨拶もできるし、入りたいと思う。では、内原町で入りたいと思ったときに、町内会のことを何も知らないのです。近くのおじいちゃん、おばあちゃんも、御挨拶もしたことがない、アパート住みなので、会ったこともない。

そういうときに、さっき話が挙がりましたように、取っかかりがスマホのコミュニティーなど、もともとつながりがあるというところのほうが会いやすいな、入ってみたいなと思うとは思いました。

実際に、もう既に町内会に入りたいと思って、何回か子ども会とかも検索をしたことがあるのですが、この地域に、こういう子ども会が、内原第一何とかとかあるのですが、ではどうやって入ったらいいのかまでがサイトでは分からなくて、今、3歳の娘を抱えて、そのうち小学校へ上がるくらいには何かしらの方法で入る方法が見つかるかなぐらいの知識しかないので、本当に町内会とか子ども会をつなげたいのであれば、そのホームページの見やすさ、あとはつながりやすさが重要なのかなと思います。

ふれあいまつりとかを双葉台とか内原とかもすごく活性化してやってくださって、こどもを連れて、これは参加するだけではなくて、私も、30代として、担い手として盛り上げるほうをやりたいなと思っても、そこにつながる誰か、つての顔が分からないとつながれないというのがすごくもったいないなと思うので、町内会をつなげる工夫をぜひお願いします。

○高橋市長

ありがとうございます。

それをさんざんやってきたのに、こういう話が挙がるということは、市民生活課長はいかがですか。さんざん新しい人が町内会に入りにくい環境はやめよう、きちんとマッチングしよう、この人のところへ行けば町内会に入れるよ、子ども会に入れるよ、そういうことをやっていきましょうとさんざんやってきたのに、そういう声があるということです。

引っ越してくるときに、ここの町内会があります、あなたのところの町内会長はこの方です、行ってください、何だったらこちらが紹介しますということ呼びかけようということをこれまでやってきたのです。市民生活課長、まずやってきたことを言ってください。

○市民生活課長

今のような意見をいただきまして、今までの我々が住みよいまちづくり推進協議会と一緒にやってきた勧誘活動があまりよろしくなかったのかと反省しています。

我々といましてはこの後、4月から、それぞれの地区を所管しております市民センターのホームページをリニューアルしまして、そこから、今お話にあった町内会の加入の仕方などを分かりやすく説明し、そこからアクセスできるようにするため、今、作業を進めているところでございます。期待してお待ちいただきたいと思います。

これから悪かったところを反省して、頑張りたいと思います。

以上でございます。

○高橋市長

ファーストタッチがなっていないのだよね。そういうところは私も反省しなければならない。

○市政モニター

地域コミュニティーということで、町内会の話になったので、町内会の話では私も思うところがあるのですが、町内会のイベントとかコンテンツが我々世代からするとひどく高齢者寄りなのです。町内会の集まりは平日の10時から、どこどこ公民館でやりますとか、これでは、一般的に働いている人は行けないですよ。例えば、女性も今は働いている方が多いので、平日の昼間からやります、午前中にやります。高齢者にとってはゴールデンアワーだと思うのですが、一般の働いている人間からすると参加できないのです。

予算の執行も、私は全部を見たわけではないですが、高齢者よりのイベントに予算も振られている。もちろんそれは既存で入られている会員の方がお年を召した方が多いのであれば、そこが主体になるのは仕方ないとは思いますが、若い人たち、一般的に働いているであろう層が参加できないような時間帯に集まりを開かれてしまうと、そもそも参加できないというふうになるのかなというのは不満としてあったので、申し上げさせていただきました。

○高橋市長

それは私も感じています。

そういうところについて、住みよいまちづくり推進協議会のほうには、できれば土曜日、日曜日、あるいは夕方、夜にも開催してくださいとお願いしているのですが、そういう意見があるということは住み協のほうにしっかり伝えていきたいと思っています。伝えるだけではなくて、改善させていきたいと思っています。

また話は戻りますが、新しい助け合いのコミュニティーというものを、若い方々の価値観の中で、つくっていくしかないのかなと思います。今の町内会の中で、昔のような隣近所で、「ちょっとうちのこども見ていてよ」と言って、知り合いのじいちゃん、ばあちゃんに預けるというようなコミュニティーではもうなくなってきているのだと思うのです。

私は昭和40年生まれ、1965年生まれで、皆さんよりも一世代上の人間なのですが、私らの世代までは、私の親も共稼ぎだったものですから、じいちゃん、ばあちゃんもいないときには近所のおばちゃんのところへ預けられたりしたのです。逆に、うちで預かったこどももいるのです。そういうことがあったのです。それは昭和の話なので、今さらそういうことでコミュニティーをつくりましょうといってもなかなか難しいと思います。

ですから、例えば、有料であってもシステム化して、きちんと安心して預ける。昔だったら、何時から何時までちょっと預かってくれよと。別に料金が発生したわけでも何でもない。システム化したわけでもない。あるいは、事故が起こったときの補償が決められていたわけでもない。それは昭和の時代の話になってしまっているのです。例えば、スマホアプリ等でお互いに助け合えるような仕組みをつくろうとすれば、きちんとしたシステム化とか、安全・安心のためのいろいろな補償の問題とか、保険の問題とか、事故の問題とか、いろいろなことを解決しながら、私たち行政がシステム化していかなければならないのかなということを知っていて思いました。

新しいコミュニティーの在り方について、今はファミリー・サポート・センターはやっているのですが、デジタル化して、裾野が広がっているわけではありません。非常に限定的な

方々の利用で、さっき話した申込みでアナログ的なマッチングですので、こういう新たなやり方もあるなということを研究もさせていただいて、前進をさせていきたいと思っています。

既存の町内会とか、青年会議所とか、いろいろな団体のほうにも、こだわりながら、皆さんが入りやすいようなコミュニティーを、別ツールで、あるいは、別な世界でつくっていくしかないのかなというようにも思ったりはしました。それこそ二刀流で研究していきたいと思っています。

文化芸術活動の話については、類似するものを生涯学習事業でやっていますし、市民センターを利用できることから、特に新しいハードを何らか整備するというものではないかと思っています。これは健康増進とか、コミュニティーとか、子育てとか、いろいろな面で芸術文化に親しんで、感性を磨き上げるというのはいいことだと思います。御意見の反映のさせ方について、いろいろ検討させていただきたいと思っています。

障害者福祉のお話について、これは申し訳ございません。いろいろと教えていただきまして、私も気付かないところがありました。

ただ、箱物については、今からルネス花北を全部そのまま揃えるというわけにはいかないものですから、民間でやっている取組もあるので、そういうところと連携をしながら、私たち行政が持っているいろいろなノウハウとかソフトウェアと、民間が持っているノウハウ、ソフトウェアを合体させながら、こういう機能を持たせることができるかどうかということ、民間の協力も得ながら、その仕組みをつくり上げてみたいと思います。

全くこのとおりの箱物を用意するというわけではなくて、今、既存にあるもので、仕組みをつくっていけばいいと思うのです。

市内にはいろいろな医療機関があります。例えば、私が県会議員の頃に誘致した愛正会があります。誘致していた時、どこか別なところに行ってしまうという話が挙がったため、反対運動を起こしたところ、県のほうで、では民間だったらいいだろうという結論になり、民間に任せてあの施設を造らせたのです。そういうところと連携をしたり、民間のところと私たちと合体させてやれるようなことがあるのだと思うのです。

今日のお話を聞いて、いくら姫路市が大きいまちだからといっても、それだけの差を生み出してしまっているというのは行政の責任ですので、いろいろと工夫して、どういう仕組みをつくれるか、私のほうから指示を出したいと思います。いろいろな困りごととか、こういうところが足りないとか、どんどん言っていただければ結構ですので、すぐ解決できるものと解決できないものがあるのですが、一步一步進めていければ、いずれ完成形ができると思いますので、それはざっくばらんに言ってください。

私たちも当事者意識を持つように、しっかり取り組んでいきたいと思っていますし、花火大会における対応とか、そういうところもいろいろ検討していきたいと思っています。

水戸市もさすがに動物園は持っていないのですが、植物公園とかアートタワーの入場料とか、そういうところはいろいろ優遇をしているのですが、水戸市が持っていて、普段、有料で入場するなどの面は、内部を全部精査してみたいと思います。

今、少なくとも、植物公園とアートタワーは無料にしてあるそうです。いろいろ工夫させていただきたいと思いますので、もっともっという御意見をください。場合によっては、こちらのほうからいろいろお尋ねもさせていただきたいと思います。

ありがとうございます。

教員に関する御提言についてですが、教員の狭い世界ですから、お分かりだと思うのですが、水戸は人気がないのですよね。とにかく教員が来たくないのが水戸だといわれています。

私たちが悪いのもありますが、理由はいろいろあります。

働き方改革等も含めて工夫はさせていただいています。特に、最後に話題にありました不登校については、この後4月から、中学校全部に、16校で一気に校内フリースクールをつくらうと思っています。最初は1つ、2つなんて言っていたのですが、千波中学校でモデル的にやっていて、結構成果が出たものですから、一遍にやっつけようということで、市内の全市立中学校16校に校内フリースクールを4月からつくります。

何か経過報告はありますか。

○教育研究課

現在、準備をしています。

○高橋市長

順調ですか。

御存じのとおり、先生のOBとかにお願いをしなければならないものですから、少なくとも16人を探さなければならないということなので、何とか頑張って、4月から16校全部で始めるようにしたいと思います。

ただ、笠原中学校と第四中が、大規模な中学校なものですから、教室がないのです。

まだ検討中ですか。

○教育研究課

まだ検討中ですが、別な場所への設置を考えています。

○高橋市長

何とか16校全部で、多様な居場所をつくっていきたいです。必ずしも学校のもともとの何年何組という教室に入らなくても、いろいろな過ごし方があって、そこで最終的には子どもたちがまた自立できればいいのかなと思います。何々しなければならないという決め方はやめて、いろいろな過ごし方、それから、学び方を多様化していくということが必要だと思いますので、まずは第1弾、中学校全部に校内フリースクールをつくる。そこから今度は小学校に伸ばしていこうかなと思っています。

プレゼンにありました専門の学校をつくれるかどうかというのは次の課題とさせていただいて、今、目の前にある校内フリースクールを全校に広げていくような取組をまずはしていきたいなと思っています。

あとは、できるだけ教員が水戸を選んでくれるようにしていきたいです。それでなくても教員になる方が少なくなってきた中で、水戸が選ばれないというと、子どもたちが一番不幸になってくる話になってしまいます。

全員担任制というもの、取手市でやっているということを私は分からなかったものですから、そういうことも含めていろいろ研究させていただいて、先生が働きやすい環境にしていきたいと思っています。

水戸は、給食費を払わない親がいる結果いろいろな問題もあったものですから、早いうちに給食費について公会計にしました。

今は学校に対するクレームも多いものですから、スクールロイヤーとしての弁護士を設けて、ある一定の線を越えたら、もう学校の先生の対応ではなくて、本庁が対応して、弁護士を向けるというような取組も数年前からやらせていただいております、少しずつですが、教員の負担軽減が図られるようにしています。

あと、私が就任してから、スクールサポーターを全校に配置して、習熟度別学習をやらせたりとかということをやっています。

それから、先ほどの障害者のお話なのですが、特別支援学級が少し手薄だったものですから、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどの専門的な人員を増やして対応していきます。

あとは、発達障害の方の判定機をもっと最新型にしてほしいとか、いろいろ要望を受けているので、そういったものを用意しながら、充実させていきたいなと思っています。

そういうところでも、できるだけ先生方の負担を軽減するような方策を取っていききたいなと思っています。

最後に、子育ての御提言の件につきましては、分かりました。ありがとうございます。一つ一つ、いい意味で潰していきたいと思います。潰すというのは、取り組むという意味の潰すです。

特に経済的負担の軽減について、今も補助制度などを提言をいただいたのですが、年中私が言われているのは、早く給食費を何とかしてくれということなものです。令和5年の4月から中学校の給食費を無償化したのですが、令和6年の4月から小学校に手をかけるということで、小学校の給食費を半額ぐらいにしようと思っています。半額にして、来年あたりは無償化していこうかなと思っています。

あとは、保育料についてです。今、0、1、2歳については保育料をいただいているじゃないですか。3、4、5歳についてはもちろん幼稚園も保育所も無償化されています。しかし、0、1、2歳では、3人目は無償化されているのですが、1人目、2人目はいただいているわけです。せめて一段階として、2人目以降ぐらひは無償化していきたいなと思います。そうすると、0、1、2歳の1人だけ有償で、2人目以降は無償化ということになります。そのところをまずやっていきたいなと思っています。

あと、どうしようかなと考えているのは、医療費についてです。所得制限を撤廃して、18歳まで助成しているのですが、600円だけいただいているのです。その600円すらなくしてくれという声もあるのですが、優先順位としては、今、いろいろ言われていることのほうが先なのかなと思っています。

まずは給食費を小中学校で全額無償化をやって、保育料はせめて第2子以降は無償化をやってと、そういうところをやりながら、次の段階でいろいろな補助制度を考えていきたいなと思っています。

私もあと3年の任期しかないのですが、その中で何とか進めていければなと思っています。

何年か前の市政モニターの中の1人から、「とにかく水戸市で子育てをされていていいと思ったことは1回もない」ということを言われました。私が市長になってから、子育てと教育については、予算を100億円近く増やしているのだけれどもなと思ったのですが、それは真摯に受け止めていかなければなりません。その中で、特に産褥期というのですか、ここがイ

ンターネットで検索してもヒットしないと言われたのです。そのキーワードを入れると日立市のほうが出てしまって、水戸市が全然出てこないと言われてしまいました。

ですが、水戸市では産後ケア等を行っているのです。実は日立市より全然すごいことをやっていたわけです。水戸市は看護師を訪問させて、すごいことをやっているのですが、インターネットで検索しても水戸市で全然情報が引っかからなくて、私は調べるのに苦労したと怒られました。実は、日立市よりも全然前にうちのほうが訪問型でやっていたのですが、最近サイトを作ったから、引っかかるようになったのでしょうか。

○子育て支援課

出産された御家庭には、必ず保健師とか助産師、専門職が訪問させていただきまして、お話をする中で、悩みとか、産後の不安定な思いとか、そういうことを聞き取りしています。必要であれば、産後ケアといたしまして、医療機関とか茨城県の助産師会と委託を結びまして、宿泊型、通所型、訪問型の3種類のケアをしているところです。

多分、日立市では自己負担がないということがあると思います。

水戸市では、例えば、医療機関で1泊2日でケアを受けた場合、3万4,000円の委託料なのですが、課税世帯の方には2,500円の御負担をいただいて、3万1,500円は市で負担しております。非課税世帯などの方は無料ということなので、市で3万4,000円を全部負担しています。

医療機関によりまして、例えば、5万5,000円という場合もありますので、そのときには、その差額を、2,500円よりは多く御負担いただく場合もございます。

○高橋市長

そうか、そういう負担が言われていたのか。情報が引っかからなかったとかという話だけではなく、無料というのものもあるのか。

そういうところも他市と比べながら検討しなければならないなと思います。

それと、今、なるほどなと思ったのは、妊娠中から産後半年の間に未就園児を持つ親は、就労状況に関係なく、保育園にその未就園児を全て入園させることができる御提言について、幼児保育課長、こういう制度はどうですか。

この間、育休に入ったら上の子を辞めさせるとかという理不尽なことがあったではないですか。私は言われて初めて分かったのですが、そんな制度をやっていたのかと思って、それはやめさせて、今、育休に入っても、上の子は辞めさせなくていいというルールにしたのです。

専門的な立場からするとどうなのでしょう。なるほどなと私は思ったりもしたのですが、こういうこともあってもいいかなと思ったりもしました。

○幼児保育課

現状におきましても、妊娠・出産というものは保育を必要とする事由としていまして、おおむね出産予定日の2か月前から、出産日から起算して8週間を経過する日の翌日、二、三か月というのは保育を必要とする事由としています。ここで提言されているように、全てできるということではないのですが、市で申込みを受け付けている場合もございます。

○高橋市長

申込みは受け付けているんだ。申込みを受け付けているということは、入園できるという

ことなののでしょうか。

○幼児保育課

はい。ただ、提言の場合、全てできるというふうになっていますが、どうしても優先度から、利用調整の中で、必ずとは言いがたいです。

○高橋市長

いわゆる待機が出てしまう可能性も出るということですか。保育所が空いていれば、みんな受けられるのでしょうか。

○幼児保育課

どうしても数か月というような期間の利用になりますので、こちらとしましては、そういった事情を考慮しまして、利用調整の中では、最大限配慮をして、また、例えば、御希望でないところを斡旋するというような形で利用調整に努めているところでございます。

○高橋市長

いずれにしても、何となく気持ちは分かるなというふうに、今、この話を聞いていて思いました。

内部でいろいろ検討させてください。

私ばかりずっと話してしまいましたので、何かありますか。発表者ではない方でもいいです。

○市政モニター

さっき市長がおっしゃってくださったことへのアンサーというか、ちょっと思ったことなのですが、フリースクールというのがすごく有り難いと思う反面、学校で働いていたときの私の学年の主任が、不登校の生徒に対して、まず学校に来させなさいと私に言ったときに、ああもう価値観が違うということを学校内で感じました。

そういうふうに、実際に働いている教員間でさえ、学校にとにかく来させなければと思っている上の世代と、いや、違うと思っている20代、30代の世代とで既にギャップがある中で、フリースクールの担当が教員OBで果たして大丈夫なのかなという心配があります。

私もそうなのですが、若い人が教員免許を保有しているのにどんどん辞めていく。子育てをしていく上で、もう辞めざるを得ないという友達、茨城大学の教育学部の同級生が何人も辞めていく状況は大学にも申し訳ないです。こどもたちにも関わりたいけれども、心を病んで辞めた友達もあり、あんなに真面目に大学に通っていた人が、保護者対応と上の人の対応の悪さで辞めていってしまったことがすごく残念でした。

いろいろな大学で教員免許を取れる状況ですので、若い人がもっとこどもたちに接することができるようにしていければよいです。こどもたちも、年代が近ければ近いほど話題も合うし、心を開きやすいところもあるので、ぜひ教員免許保有者が短時間でもフリースクールの担当をしてほしいです。

私は美術の担当だったのですが、特別支援のほうの担当も、大体、毎週の授業の時間数が少ない人、美術とか音楽とか技術とかの先生がなりがちです。専門的だからなるのではなくて、そうすると校務分掌が回るからという理由でなりがちでした。私は担任になりたかったので、担任になれてよかったのですが、能力的に劣っている年配の先生か、そういう教科の先生になるみたいな影響がまだまだ残っているなというのがすごく残念で、普通学級の先生

こそそういう偏見をなくして、しっかり勉強をしてほしい。夏季講習で学んでほしいです。学校が一致団結して、発達支援などの理解を深めたいなということを在籍のときに思っていました。

ぜひ若い人の力をもっと動かせるように、上の人の意識改革も手伝っていただけると助かります。

○高橋市長

ありがとうございます。

精神論の話になってしまうかもしれませんが、結局、私とか教育長のメッセージだと思うのです。トップからのメッセージをしっかり発することなのだと思います。

親御さんの中でも、必ずしも学校に行きなさい、行かなければならないという認識は随分少なくなってきたようで、それで不登校が増えているということも分析するとあるらしいのです。命より大切なものはないわけですから、死にたいという思いをかかえてまで学校へなんて行く必要はないと親も考えているのです。私もそう思っています。

でも、そうかといって、何年何組へは行きたくないけれども、こちらのほうだったら行ってもいいやという、多様な学び方とか選択ができるようにしていきたいなと思っていまして、それをしっかり認めるように、きちんと指導者側にも認識を持たせたいなというふうには思っています。

教育研究課から何かありますか。

○教育研究課

今のフリースクールの件なのですが、市としても選択肢の一つということで考えております。ですから、無理やり連れてくるとか、そういうことではなく、本人の希望ということで、登校すること、または帰る時間等についても本人の希望を第一に考えています。

我々としては誰ともつながっていない子どもがいる、一人で自宅にこもったまま何日も学校に来ない子どもがいる、また、1年間、全く外に出ないというような子どもがいるという実態も踏まえますと、少しでも誰かとつながれる。そして、選択肢として学校に来てみるというものを増やしていきたいということで取り組んでおります。

以上です。

○高橋市長

市立学校では、先生に負担をかけているのかもしれないのですが、タッチ率は高いのです。

普通、不登校の子って、放ったらかしにされてしまって、タッチ、接触がないのです。平均何%に対して、うちは何%ぐらいあるのでしょうか。接触率が相当高かったでしょう。

○教育研究課

県とか国に比べますと、何十倍も高いということで、教員をはじめとする皆さんが本当にいろいろな関わり方をしてくださっています。

学校の教員だけではなくて、家庭訪問相談員とか専門相談員、またはスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、そして、こころの教室相談員なども水戸市におりますので、いろいろな方の力を借りながら接触をしています。

○高橋市長

このどんどん上昇している不登校者数という数字よりも、質を判断したいと思っています。

ただ、校内フリースクールだと出席扱いになるから、これは減ってくるということになってくるのですが、欠席している子が必ずしも不健全かどうかという、そうではない可能性もあるのです。民間フリースクールは出席にならないのですか。

○教育研究課長

民間フリースクールにつきましては、施設がきちんとしているということで、教育委員会のほうで学校として認められている施設に関しては出席扱いとすることも可能です。

○高橋市長

出席扱いになっていない子でも、何らかの形でちゃんと生活をしていれば、学校に来なくてもいい。だから、その質はきちんと見ておきたいです。そのための接触を図っていきたいと思っています。

○市政モニター

今、フリースクールの話が挙がって、そこで個人的な感想、思ったことを発言させていたきたいです。私は、今、常磐大学4年の大学生で、実際、不登校だったり学校に通いにくい人が通っている学習支援、すてっぷ赤塚について、社会福祉協議会のほうでお手伝いをさせていただいています。

昨年度以降、規模をかなり大きくしていただいて、とても助かっています。

今、学校内でフリースクールをつくるということを聞いたときに、もし可能なのであれば、大学生を中に入れていけないかなと思いました。

と言いますのも、私自身が学習支援の活動を行っている中で、社会福祉協議会の方や元教員の方が勉強を教えても、あまり自分のことを話してくれない子どもたちが、大学生には結構話してくれたりして、その情報を社会福祉協議会の方に共有して対応が取れたりということもあったので、年代が近い方を入れて行ったほうがよい形になるのかなと思いました。

常磐大学にはコミュニティサービス連合というサークルがありまして、そちらでも、日立市のほうで民間のフリースクールプロジェクトという新しいフリースクールをつくるというプロジェクトを市議会さんとNPO団体と協働で行っています。常磐大学には、そういったところに興味がある大学生というのは結構な割合でおり、私自身は今年で卒業してしまうのですが、後輩たちが絶対に力になることができますと思います。もし可能であれば、お声がけしていただければなと思いましたので、発言させていただきました。

○高橋市長

ありがとうございます。

常磐大学には、共創センターがあるから、そういう意見が出たので、手伝ってもらったら有り難いと思います。

包括連携協定を結んでいるから、共創センターのほうに相談します。

○司会

ありがとうございました。

○司会

続きまして、「住みつづけたくなる水戸」に関する提言について、順番に発表をしていただきます。

それでは、「住みつづけたくなる水戸」の皆様、発表をお願いいたします。

○発表者 5

私の提言は、12ページに理想とするまちの姿が、28ページから理想のまちとするための課題と取組を掲載していますが、本日の発表では、この提言書に盛り込めなかった私の心の部分をお伝えしたいと思っています。ですので、提言書からは目を上げていただいて、私の話をお聞きいただけますと幸いです。

どうぞよろしくお願いします。

私は、3年前に水戸市の子育て世帯向けの補助金制度を利用して、水戸駅前に引っ越してきました。

6歳と3歳の子どもを抱えて、夫婦共働き、フルタイム勤務で何とかやっています。

私たちの両親はどちらも遠方、近くに住んでおりませんので、日常生活においていろいろな支援を期待することはできません。

そんな私の提言は、水戸駅周辺で生活が完結する、共働き子育て世帯の住みやすいコンパクトシティ水戸です。

これは、水戸駅前の利便性を向上させ、交流の場を整備し、そして、市民の心を育むことで水戸の未来をつくるものです。

まず、利便性の向上についてですが、水戸駅前の商業施設を充実させます。

今、駅ナカのお店というのは、品数が結構少なく、平日働いている私は、まとめ買いのために、週末に、駅前に住んでいるにもかかわらず、車で10分ほど走らせたところに買い出しに行かなければならない状態となっています。駅ナカ、駅周辺で全て必要なものを揃えることができれば、私はわざわざ車に乗って買い出しに行かなくてもよくなります。そこが利便性の向上に当たるところです。

次に、こどもが大きな声を出して走り回っても怒られない、全店舗型、雨の日でも走り回って遊べるこどもの遊び場をつくります。

これは、ただ単に箱を造れということではなくて、交流というコンセプトを明確に打ち出した場を提供するということです。

現在、こどもに対する責任というのはこどもの親に集中しています。外に出て行って、ほかのこどもと遊ばせたいと思っても、よその人は親とこどもが向き合っているような状態です。それはなぜかという、他者とのトラブルを恐れているのです。他者とのトラブルを避けるために関わりを持たないようにするのです。なので、外に出ても、一家族、一家族が別々に遊んでいるというような状態です。

私は、こどもというのは、他者との交流を通じて成長するものだと思います。

私が思い描くこどもの遊び場というのは、自分のこどもだから、他人のこどもだからという自分と他人の区別をつけずに、みんなでこどもを見守って交流する場です。

最後に、子育てというのは母親がやるものだという性別役割、こどもは子育て世代がやればよいという世代別の役割、それから、こどものことはそのこどもの親がやればよいという

自分と他人の区別といったものにとらわれない、みんなでこどもを育てていきたいと思いますというメッセージを子育てサークルや子育てイベントで発信していきます。

みんなで水戸の子を育てるのだという意識を醸成して、母親や子育てする親を追い詰めない、他人に無関心にならない、みんなでこどもを育てましようという意識・環境づくり、みんなで支え合う環境づくりをします。

これらの3つの要素全てが揃うことで、住みやすい水戸駅周辺が実現します。

私の提言は、水戸駅周辺の生活の質を向上させるとともに、昨今、マンション供給が進んでおりますので、昨今のマンション供給との相乗効果により、水戸駅周辺の集中というのをより一層進めるものです。

また、他者との交流を重視するまちで育ったこどもというのは、まちに愛着を持つことで、大人になってから自分のまちに戻ってきて貢献しようと思い、また必ず戻ってきます。これは未来への投資なのです。

ですので、水戸市長をはじめとする水戸市役所の皆様におかれましては、ぜひ水戸の未来に投資すると思ってこの提言を形にさせていただきたいと心から願っております。

以上で、私の発表を終わります。

御清聴いただき、ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。

続いての方、発表をお願いいたします。

○発表者 6

私は、提言の6番目ということで、高齢移住者に魅力的な歴史都市みとということで提言をまとめさせていただきました。

私の提言なのですが、先ほどの提言名にもありましたが、歴史とか公共交通に関するものになります。

現在の水戸駅前には弘道館や水戸城など歴史的資源がたくさん存在します。

また、先ほどの御提言にもありましたが、スーパーマーケットとか日用品を購入する施設も存在します。

こちらの写真は、現在、水戸駅を発着するバスの時刻表ですが、公共交通機関での移動も可能な状態となっています。

こちらが路線図で、水戸市内をバスで移動することができるようになっています。

こちらは、水戸駅前でバスに乗り込む水戸市民たちです。下の写真を見ていただければと思うのですが、水戸駅を出て最初の信号、銀杏坂の信号を右へ曲がりますと、弘道館や歴史資源のほうへ向かう道になります。ただ、この辺は坂道が多いというところで、移動が困難な方もいるかと思うので、こちらの改善が必要なのかと思われます。

その先へ進みますと、大手門付近に行きますと大分道は整備されて、移動のしやすさがあります。その一方で、駐車場の問題があるかなと思われます。

水戸市内の観光地を回るだけでも、水戸の歴史に触れることができます。

どの世代も、日常生活の中で水戸の歴史を学んでおります。講演会とか水戸黄門漫遊マラソンのようなイベントを通して歴史に触れることができます。

そのほか、日常生活の中でも、散歩や買い物等で歴史に触れる機会は多くあります。

こうしたことでまちの活力が生まれていて、他市町村からの移住を検討している人などが見学に来て、特に高齢者に人気を集めているものと思います。

水戸市民は、移住検討者のような、水戸に興味がある人に接することで、水戸の歴史的魅力を伝えるような働きかけをしているものと思います。

このような水戸というまちで暮らす市民というのは、水戸城や弘道館を中心とした水戸ならではの魅力を感じることができます。そのことにより地域に対して愛着を持つことができます。

さらには、高齢者から強く人気を集めることで、若い世代に水戸の魅力を伝えることができます。どの世代においても水戸の歴史を学ぶことができるようになっていきます。そのため、他のまちとは違った特別なまちができるものと思っています。

そこで、私は、理想とするまちの姿を、高齢の移住検討者に水戸ならではの魅力が伝わるまちといたしました。高齢の移住検討者に水戸の魅力を体験してもらうため、水戸の人やものに触れる機会を拡充するということを課題として上げております。

取組といたしまして、次のような取組を上げさせていただきます。

今から上げさせていただく取組というのは、お隣、ひたちなか市で実際に取り組んでいるプログラムでして、高齢の移住検討者をターゲットとしまして、水戸市の観光と移住者との交流を兼ねましたお試し移住体験会を提言いたします。

内容といたしましては、現状展開されているものも含めまして、特に、北関東に、移住検討をしている高齢者を公募したり、高齢になってから水戸市に移住した方との交流会を行うことで、移住・定住が促進されるものと思います。

駅前にも、このように、提灯など、歴史を感じられる資源がございます。

また、先ほど話しましたように、大手門付近には、水戸学の道と題しまして、情緒ある雰囲気が出ております。こういったものも実際に行ってみると感じることができます。

最後に、今回、水戸の歴史についての提言をさせていただきましたが、水戸のよさを振り返るには歴史に着目することが効果的であると思います。今後の移住・定住施策の参考になればと思います。

本日は、御清聴ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。

○司会

続きまして、発表を基に、高橋靖水戸市長と懇談をしていただきます。

よろしくお願いします。

○高橋市長

水戸駅前の件はごもっともな話で、せっかく駅を中心としたまちづくりがあるので、そこで完結して生活してもらうのが一番よくて、よほど特殊なもの以外は完結すべきなのだろうと思っています。

話の中で、逆に皆さんにもお伺いしたいことがあるのですが、公共政策として、子育て支援に関することとか子育ての環境づくりというのは、例えば、こちらがお金をかけたにしても、ここに出ている「ハレニコ！」みたいなものができるかどうかというのはまた別問題としても、子育て支援施策等について、考え方なのではないでしょうか。

ただ、一方で、経済的な市場原理で動くものについては、私たちも難しくて、なぜなのだろうと思っているのです。実は、私、水戸ステーション開発の取締役をやっているのです。それはエクセルとかエクセルみなみの運営をしている会社なのですが、2か月に一回ぐらい取締役会があって、そのときに売り上げはどこがいいとか悪いとかの報告書を見るのです。秘密事項もあるので詳しいことは言えないのですが、非常に厳しい状況にあるのです。特に、衣料品などについては相当厳しいです。特に今年は暖冬で厳しくなっているのですが、駅の優位性みたいなものがなくなっています。エクセルみなみにスーパーがありましたが、今は別なものに変わってしまっています。あの変更については私は取締役会の中で大反対をしました。

ところで、住んでいらっしゃるのは、南口側ですか、北口側ですか。

○市政モニター

私は北口側に住んでいます。

○高橋市長

北口ですか。

駅のスーパーを北口の1階に集約するからということで、また、成城石井をつくるからということで、私も、最後は、会社の方針だからということで納得はしたのですが、ただ、成城石井が必ずしも庶民的な価格にあるのかどうかということもあるし、狭かったりもするし、とにかくスーパーが成り立たない。昔、南町2丁目にダイエーがありました。今はマンションになっているのですが、建て替えてマンションにするときに、地区計画の許可を出すにあたって、1階にスーパーをつくらなければ絶対に許可を下ろさないという条件にしたのです。私は400平米ぐらいのものをつくれと言ったのですが、最低限度の100平米ぐらいのコンビニが少し大きくなったもの程度のものになってしまったのです。今度、大町にかわねやができたりはするのですが、なぜかスーパーを誘致しようと思っても、駅前に立地しにくい。どういことなのか。土地とか家賃が高いからなのか、今、非常に難しい状態で、それは悩んでいるのです。

だから遠いところで、サンユーのほうまで行かなければならないというところになってきてしまうのだと思うのですけれども。

駅の優位性というのが少し弱まってしまっているというのはなぜなのでしょう。そうかと

いって、マンションは結構できているのです。人口は実は駅周辺についてはそれなりに増えています。

○市政モニター

私は、この点ですごく御意見を申し上げたいことがあります。

エクセルみなみには以前、北野エースがありました。今はわくわく広場になっていますが、あそこはわくわく広場ではなくてフードコートにすべきでした。

私の実家は神奈川県のカ崎で、その周辺も、駅ナカでも子連れで行きやすい環境の整備がどんどんなされています。私の実家の最寄り駅は川崎駅で、私が幼い頃は、もちろんこども向けの施設なんて全くなかったのですが、今はこども用品店があつて、屋内こども用遊戯施設があつて、フードコートもあつてということで、土日は子連れでものすごく賑わっています。

なぜ駅前で優位性が持てないかというと、そもそも水戸は車社会なので、皆さん、車で移動されるのです。それで駅をあまり利用しない。

本来、駅が発展するのはなぜかというと、人がたくさんそこを利用するからです。通勤とか通学で必ず人がたくさん来るからこそ商売が成り立つようになる。とにかく母数を増やさないといけないのです。

私はエクセルのヘビーユーザーですので、よく利用させていただくのですが、すごく頑張っているのは伝わります。伝わるのですが、どうしてもレストランが一軒一軒なくなっていくたり、お店もなくなっている。でも何とかまた新しいお店を入れてくださっている。ただ、母数としての人が増えない、周遊人口が増えないので、お店をつくっても長く続かないのです。

私の提言では、まず、周遊する人口を増やしたいのです。駅に来る目的をつくる。その一つが、箱物になってしまうのですが、「ハレニコ！」のような屋内遊戯施設とかフードコートということなのです。今の水戸駅は、とにかくこどもを連れて行きにくいのです。通路がちよつと狭めだったり、お店も、レストランはあるのですが、この発表スライドに入れようと思ったのですが、1年ぶりに行ったらお店からキッズメニューがなくなっていたとか、そうしたら大人のものを頼んで分けるしかないではないですか。より一層行きにくくなるわけです。

その点、何でフードコートというかというと、フードコートは、お店に入った人全員が頼まなくてもいいのです。子連れだとよくあるのが、こどもはお腹がすいていると言うけれども、親は別にお腹がすいていないとか、こどもは食べる量が少なくて、どのくらい食べるか全然分からないけれども、とにかく1人1品ずつ注文しなければいけないとか、すごく不便なのです。でも、フードコートでは食べたいものを食べたい分だけ頼めるのです。そうすると、親は飲み物だけちよつと頼めばいいわとか、こどもはハンバーガーが食べたいと言うからハンバーガーを食べさせたらいいわとかということが出来る。だから、フードコートをつくると、子育て世帯はすごく来やすくなります。ぜひお願いいたします。

○高橋市長

ありがとうございました。今度、取締役会で話してみたいと思います。

参考になりました。こども・子育てをターゲットにしたテナントづくりですね。そういう

ことが取締役会で議論になったことはありません。初めて聞きました。

○市政モニター

それは次の議題にぜひお願いいたします。

○高橋市長

そうですね。今思いました。そういう議論になったことはないですね。

○市政モニター

川崎駅は、今、東口にアトレがあって、西口に三井ショッピング系のラゾーナがあるので、ラゾーナのほうがフードコートはものすごく充実しています。アトレもフードコートっぽいものはつくったのですが、ちょっとおしゃれ過ぎて、子連れでは入れないです。

○高橋市長

民間のレベルの話になってしまうのですが、私たちは、駅周辺の機能強化、保育施設であるとか子育て支援施設を、まずは何々を無料にするとか、何々を安くするほうが今のところ頭の中から離れないものですから、そういうところをやっていないと次の段階に進めないのです。その辺のところはお時間をいただくとして、まずは今度の取締役会でビルの子育て向けのテナントづくりの提案はしていきたいと思います。

また、マイムビルについては、以前は私が管理会社の社長だったのですが、今は副市長がしています。あそこも、ある意味、うちの関係しているところなので、再開発をしないといけません。施設利用が70%ぐらいしかなくて、30%はまだ空きスペースになってしまっているのですが、そういったところも子育て向けの何かしらの導入を、ある意味、民間活力を利用するか、あるいは、そういうところに私たちが補助金とかで支援をするとか、そんな形をいろいろ考えていきたいなと思います。

確かに、子育て世帯が歩いているというのは駅ビルの中であまり見ません。一方、水戸は高校生がすごく多くて、1万2,000~3,000人いるのですが、朝夕は高校生ばかりなのです。確かに高校生って、そんなにお金を使わないからなのかなとは思ったのですが、エクセルの中に高校生が買うものがないと聞きました。

○市政モニター

あります。プラザという雑貨店の他、ハニーズという洋服屋さんもあります。

○高橋市長

洋服屋は、私たち世代よりちょっと下、皆さん世代なのかな。30代、40代の方を対象としているものばかりなのです。だから、高校生を対象としていないのです。

ただ、高校生は別に自分で買うということはないから、あれだけの分母がいるのに、実は、高校生をターゲットにしたビルづくりになっていないのです。そういうところも機能は弱いかなと思ったりもしているのですが、参考になりました。

○市政モニター

フードコートの御検討をお願いします。子育て世帯向けではなくて、そういう意味でいったら、学生もお金を落としやすいので。

○高橋市長

なるほどね。フードコートはそういうことなんですね。私はそういうところに疎くて、気が付きませんでした。

一つの店だったら、みんなで和食だったら和食しか食べないものね。フードコートだったら、個人的に、今日は私はこっちがいい、じゃああなたはこっちにと、家族の中でいろいろと食べられる。意外とそういう簡単なことに気付かなかったというのが私たちの感覚です。

○市政モニター

フードコートだと車椅子も入りやすいです。通路が広くて、椅子も自由に動かせるので、割と車椅子も入りやすかったり、自閉症の子とかも、偏食が多いので、家族で食事をするのが難しかったりもします。そういう意味では選択肢が増えるので有り難いです。

○高橋市長

分かりました。そういう提案をしていきたいと思います。

もう一つ、歴史都市づくりのお話、これはしっかりバリアフリー化させていくということです。今度、駅前のほうも再開発が進んで、あそこにマンションと業務棟ができて、その間に道路ができて、歴史景観づくりのほうにつながるような形になるのです。ペDESTリアンデッキから直接三の丸の方に向かえるような形になるのですが、そういうところもきちんと事業者と連携しながら、今あるでこぼこをバリアフリー化させて、まち歩きが楽しくなるような形にしたいなと思います。

ただ、ちょっと微妙なところがあって、昔、日本型ＣＣＲＣというのがあり、例えば、当時、笠間市などは立候補したのかもしれませんが、水戸市は実は立候補しなかったのです。ＣＣＲＣというのは、元気な高齢者をそのまちに集めて人口を増やしましょうというものなのですが、水戸市はかたくなにやらなかったのです。そのときは元気でも、65歳というと、20年なんてあっという間だから、85歳になって、みんなで高齢者になってしまうまちができてしまったら大変だということで、水戸市はＣＣＲＣには乗らなかったのです。目先の人口を増やすだけではなくて、将来、20年後、30年後を見据えたまちをつくっていかなければならないということで、高齢者を1つのまちに集めるという考え方は賛同できないということでやらなかったのです。

ただ、高齢者をそこに集めるとか集めないとかではなくて、高齢者であっても、障害者であっても、健常者であっても、誰もが歩きやすかったり、過ごしやすかったり、歩いて楽しいまち、ウォーカブルなまちというのは特に中心市街地でやっていかなければならないものです。今、水戸市も民間団体が補助金を活用しながら運営しているようなので、そういうところも参考にしながら、高齢者でも障害者でも歩きやすい水戸のまちなかをつくっていきたいなと思っています。

これもハードであつたり、あるいは、拡張には地権者の同意を得たりということで、ちょっとハードルはあるのですが、まちなかはそういうふうにしていきたいです。

特に、さっき言いました、お子さん連れでもベビーカーで歩きやすいように、高齢者も杖をつきながら歩きやすいように、そういうところをしっかりと目指していきたいと思っています。

時間の関係で、抽象的なことで申し訳ないのですが、いろいろありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。

○司会

続きまして、「日本で一番輝くまち水戸」に関する御提言について、順に発表させていただきます。

「日本で一番輝くまち水戸」の皆様、お席の移動をお願いいたします。

○発表者 7

本題の前に、小話をさせていただきたいなと思っています。

実は、私、子どもが2歳で、妻は37歳になるのですが、最近、妻が体調を崩して入院をしてしまったのです。何でかなと思ったら、どうやら1人、お腹の中にいるらしくて、妻は緊急入院中です。

こどもは保育園へ行くのですが、私は毎朝、送り迎えをしています。そうすると、ワンオペで、なかなか辛いのです。これは「みとちゃん困りごと」を早急に実現化させていただきたいなと思います。それから、女性は産後期とか産前期ではなくて、妊娠したときから体って変わるのですね。そうすると、お母さんだけではなくて、結構父親も辛いということで、今日の発表のテーマにうちの今の家庭状況がどんぴしゃだったものですから、これは盛り上げたいなというところでございました。

本題に移っていききたいと思います。

私のテーマは、「サステナブルに誰もが平等・公平に安心して、こどもを育てられるまち」ということです。今は何でもかんでもサステナブルと言いますよね。私はこの言葉が大嫌いなのですけれども。

自己紹介です。

私は水戸に本拠地を有する地域金融機関に就職しています。皆さん、ぱっと名前が思いつくところです。

私は、銀行員の中でも大分外れの街道を歩いておりまして、2015年、まずフィリピンに行っていこうということで、2年間、行っていたのです。戻ってきて、銀行へ戻してもらえるのかなと思ったら、おまえは今度、県に行っていこうと言われて、県に出向していました。そのときの部署が営業戦略部ということで、このときに、いわゆる公共政策の在り方というものを自らいろいろ習得したというところでございます。

2019年からは本社勤務に戻りまして、VCファンドを設立したり、その後は地域の輸出事業といったものの支援をしておりました。

実は、趣味でプロレスをやっているまして、高橋市長には、毎年、会場にお越しいただいて、こういった形で写真を撮らせていただいたりとかということもしております。

2021年から青年会議所にも入会して、2023年末で卒業はしたのですが、それまでずっとちびっ子広場など、いろいろ地域の活動もやっておりました。

また、水戸市役所内にもお友達が何人かおりまして、今、40代から30代後半の方々、それこそ15年ぐらい前はよく飲み歩いたり、飲み会をしていました。そんなところもございます。

本政策のテーマなのですが、一つは、サステナブルということで、目指せ、持続的な成長、成長を呼び込む施策によるさらなる成長。2番目が、輝けるまち、市を超える存在へ。ということで、このサステナブルという言葉、エコとか、そんな感じで使われるのが私は大嫌いなのです。サステナブルというのは持続的ということで、持続的というのは、どんどん成

長が続いていくというところでございます。

私の政策提言、簡単に言うと、所得制限をなくしましょう、これをやっていきましょうということです。これをやることによって、人が人を呼び込んで、成長が成長を呼び込む、そのような形になっています。

そして、もう一つ、輝けるまち水戸ということで、これはどういうことかということ、何で今こういうことをやらなければいけないか。国の課税政策が私は間違っていると思います。では、国が間違っているから水戸市がやらなくていいのか。そんなことはないわけです。水戸学とか水戸藩という学問は、当時、ずっとあって、水戸の歴史をつくっておりますが、水戸藩というのは、当時の幕府の政策を、ある意味、北方ではなくて南朝が正しいという、当時の行政府を真っ向から否定した。そういった、ある意味、市や国といった行政を超えるような存在になってほしい。

これはスペインのサッカーチームのスローガンなのですが、「クラブを超える存在」という言葉がタグのところに縫い付けられているのです。こういった思いを持って私は施策を考えたというところです。

現状の課題、公共セクターの支援の多くというのは所得制限がついている。これは、結局、子育て支援ではなくて経済支援、所得の再分配ですよね。これは確かに貧しい人には必要だよねということで、再分配をすることは必ずしも否定はしないのです。でも、それは子育て政策、子育て支援とは無関係だと思う。

これは、調整方法の不公平感もあるのです。児童手当というのは主な所得者が対象になっている。つまり、一馬力で高い金額を稼いでいると手当を打ち切られてしまう。そうすると、支援が必要な層に支援が届いていない。

子育て世帯というのはそもそも所得が高いのです。これは、提言書に表の1としてつけております。そうすると、高所得世帯における強い税負担感が挙げられます。これを所得制限なしで実施すると、高所得者が水戸に注目して移住等が増加することが考えられる。

そして、水戸ならもう1人、1人目が生まれたけれども、もう1人も生んでいこう、第2子、第3子を水戸で生んでいこうというふうになります。

得られる果実ということで、高所得者は国やほかの市町村では得られない支援が得られる。理想の住みかが発見できる。そうすると、水戸市は人口もアップするし、税収もアップします。

それだけではないのです。ほかの水戸市民も、当然、税収がアップするわけだから、公共サービスのさらなる充実、そして、先ほどの駅前のお話ではないけれども、お金がいっぱい落ちれば、事業者の所得が増える可能性もある。

所得制限なしで子育て支援実施、それが高所得者の流入を生んで、充実した生活、第2子、第3子の出生、そして、結果的に人口の増加につながり、活気あふれるまちになります。

この議論をしているときに、ほかの市町村がまねをしたらどうするのですかという意見が挙がることがあります。その可能性は大いにあります。これをやったら、多分、ひたちなか市も日立市もやるのではないかと思います。それをやったら、もっと充実した施策をやればいいのです。そうしたら、この循環に2巡目が生まれて、それもまねされたら、また3巡目のもっといい施策を打てばいいのです。そうしたらさらに循環が広がります。そうすると持

続的な成長が実現して、誰もが裨益を得られます。

これが私の施策になります。

どうぞよろしくお願いいたします。

○司会

ありがとうございました。続いての方、発表をお願いいたします。

○発表者 8

高橋市長、こんにちは。

私、本日、茨城県水戸市笠原町より参りました36歳、好きな食べ物は納豆、趣味は洗顔と保湿です。どうぞよろしくお願いいたします。

5分だけお時間をください。

まずは、高橋市長、今日は一般市民が市長に直接提言をできる環境を用意していただいて、誠にありがとうございます。

自己紹介を簡単にさせていただきますと、私は隣町の笠間市池野辺というところで生まれ育ちました。どんなまちなのかといいますと、非常に田舎です。もちろん信号はありません。コンビニはありません。スーパーはありません。病院はありません。それらの場所に行くには、20分、30分と車を走らせないと行くことができなかったのです。

そんな少年時代の私は昔から水戸市にすごい憧れを持っていたまして、水戸市にいつか住みたいなということで、10年前の結婚を機に水戸市民になることができて、現在は笠原町に家を構えて、妻とこども2人と4人で暮らしております。

そんな水戸市大好きな私は満足をしているのですが、1つだけわがまを言わせていただきますと、我々子育て世代は情報が欲しいのです。

情報って何の情報というのですが、グルメ情報とか、遊びとか、観光、スポーツ、いろいろな情報があると思うのですが、一つを強いて言うなら、私はイベントの情報が欲しいのです。

イベントの情報とは何か。我々、土日、祝日が休みの子育て世代は、さあ今度の休みは内原イオンへ行こう、ひたちなか市のファッションクルーズへ行こう、茨城町のイオンタウン水戸南へ行こう、近くの公園へ行こう、大体レパートリーが決まってきてしまっていて、非常に困っているわけなのです。

よくよく調べると、千波湖を中心にいろいろなイベントをやっているなということが分かりまして、小学生の娘がいろいろチラシを持って帰ってきてくれるのですが、これだけでは情報が足りないなと私は思っています。

日本人はずるくて、興味関心のあることは積極的に情報を取りにいくと思うのですが、知らないこととか興味関心のないことには結構否定的でして、その割には教えてくれないとか、知らないよと怒るのです。

そこで、私は、このスマートフォンの出番だと思いまして、スマートフォン一つで、もっというと、親指一つで情報を受け取ることができたならば最高だと思いまして、高橋市長も力を入れているSNSの時代だと私は思っています。

いろいろなSNSがあります。X、ティックトック、ライン、ブログ、ユーチューブ、インスタグラム、いろいろあると思うのですが、私はインスタグラムのストーリーズという機

能がすごく好きで、ボタンを1個押すだけでいろいろな情報を発信してくれる方の情報を受け取ることができる。

茨城県を紹介している人はいるのです。多い方では10万人のフォロワーがいたり、そういう方をフォローすることによっていろいろな情報を私は受け取っているのですが、水戸市専門っていないなと思っています。いたとしても人気がないのではないかなと思っています。そういう仕組みが1つでもあればいいなと思ったのです。その人をフォローすればいろいろなイベントが知れる。そこから違う媒体に案内してもいいとは思いますが、そうすることによって家族間の会話が増えたり、興味関心が出たりして、実際に行ってみよう、応援してみよう、お金を落としてみようというふうにすごくいい循環が生まれると思っています。

その発信が、水戸市民以外にも、茨城県民とか、茨城県外の方とか、もっと言えば全世界にも届けば最高だなと思いました。

どうやって発信するのというと、方法はいろいろとあると思うのですが、例えば、インフルエンサーの方と契約するとか、職員の方でも、若い方ですごく得意な方がいたり、新部署をつくってもいいですし、採用で募集してもいいと思うのです。そんなことに私たちはこだわらないのですが、とにかく発信が上手にできる方が水戸市を上手に発信できれば我々は最高だと思っています。

SNSを制する者は日本を制すると思っておりまして、どうしても人ごとと考える人が多いと思うのですが、ぜひ自分ごとと考えていただいて、水戸市を日本一の魅力あるまちにしていきたいと思います。

最後なのですが、1年間で私は財産を得まして、どんな財産かといいますと、ここにいる市政モニターの方と出会えたことが私の財産だと思っています。水戸市のことをこんなに考えていて、水戸市をよくしようという思いを持った方々と出会えたことが私の財産であり、非常に誇りに思います。大人になってできた友達だと思っています。

もっと言うと、今日、高橋市長が、夜、お休みなるとき、睡眠時に、私が夢に出てきたら1年間で報われるかなと思います。こんなスーツの裏地が変なやつ、花柄の裏地を着ているやつが高橋市長の夢に出てきたら報われるかなと思います。

ありがとうございました。

○司会

続きまして、高橋靖水戸市長と懇談をしていただきます。

よろしくお願いいたします。

○高橋市長

ありがとうございました。大変面白かったです。

まず、サステナブルの話なのですが、これも皆さんと一緒に議論をしたいと思っているのですが、先ほど、子育て支援の一丁目一番地、経済的負担の軽減、相談・支援体制の強化、こどもの居場所づくり、活動・活躍できる場づくり、その三本柱でやりますと言いました。

その一丁目一番地の中でも、とにかく私が地域のお祭や運動会などのいろいろなところで聞くのは、先ほど申し上げたとおり、とにかく何々を安くしてくれ、何々を無料にしてほしい、何々がほしいということです。この間もランドセルがほしいと言われたので、ランドセルではなくて、水戸市は現金で3万円を差し上げているので、それを足しにしてくださいと

いう話もしたのですが、会えばその話なのです。だから、それを最優先にやろうということで、中学生はやったので、今度は小学生の給食費を今年と来年の2年で何とか無償化にしたい。明石モデルに近づけるようにしていきたいと思っています。明石市は中学校しかやっていないのですが、うちは小学校までやりますから、そこは明石市を上回るのです。

ただ、疑問を持ちながら市民の皆様方の要望にお応えしているのです。経済的負担の軽減をすれば、本当にこどもの数は増えるのだろうかと思っています。要は、子育て支援にはなるけれども、少子化対策につながるのだろうかという思いがあって、疑問を感じながらこれを行っているのです。

ただ、そういう要望が一番強いので、私たち政治家は市民の声に敏感なものですから、そこをどうしても優先してしまう。

そればかりではなくて、将来に安心した収入を得るとか、働き口があるとか、いろいろなことがないとまずは結婚に踏み込まないし、給食費が無料だからといっても、安定した収入がない、あるいは、職に就けなければ、もう1人子どもを生みたいとも思わないし、総合的な判断になるのかなと思っています。

あと、まさにサステナブルな循環がどんどん広がればいいのですが、実は、各市町村間で、今、消耗戦が起こっているのです。金のある市と金のない市、あるいは町村もありますが、差が出てきてしまう。これはそこに住んでいるのだから宿命なのかなと思います。ある意味、私たちは、それに勝負をかけて、限られたパイを奪い合うような状況なのです。限られたパイを奪い合っているうちに、みんなが切磋琢磨して、レベルが高くなれば、全体のこどもが増えるのかなという思いで、今、目先のことを戦っているわけです。隣の市からも奪い取ろうというぐらいのことでやっているわけです。

水戸市が中学校の給食費を無償化しただけでも大騒ぎなわけです。水戸市の6,000人の中学生が実施できたのだから、あなたの町でもできるだろうと各首長がみんなに言われるのだそうです。プレッシャーになってしまっている。とんでもないことをやってくれたとほかの首長からは言われているわけです。

愚痴を言えば、子育ては、国が異次元の子育て支援と言うくらいなのだから、まずベースのところはやってくださいと。ベースというのは、大学生のことです。大学生まで教育費とか何かは無料にしてもらって、ベースのところはってもらって、先ほど御提言が挙げったような特殊ないろいろな補助制度があるではないですか。そこは個性なのだと思うのです。例えば、極端に言えば、スポーツ少年団にかかる金を水戸市は出しますとか、あるいは、塾だとかいろいろな習い事にかかるものをやりますとかというのが個性なのだと思うのです。だけど、そのベースのところを国がやらずに、今、私たちが戦っているのです。これは不健全な状態だなと思っています。それが行政の状況です。

最初の話に戻りますが、経済的負担の軽減は子育て支援にはなるけれども、果たして本当に少子化対策になるのかどうか。その辺のところを皆さんの御意見をいただきながら、次に、経済的負担の軽減の先に一体何があるのだろうか。さっき言った生活の安定だとか、働く場所の確保だとか、いろいろなことがあるのだと思うのです。そういうところの御意見をまず聞かせていただきながらこの政策は進めていきたいなと思っているのですが、いかがでしょうか。

○市政モニター

ここで想定していたのが、児童手当の減額、あるいは所得カットになっている層というのがどれぐらいいるかということなのです。細かく検証をしたわけではないですが、例えば、日立製作所とか、J Xとか、それ以外の企業はあるわけですから、そういった層の方が転勤するときに、多分、どこも横並びだったらどこも選ばないですね。では、会社に近いから日立市にしよう、ひたちなか市にしようとなるところを、給食費が無償化になるから、うちには中学生がいるから、では水戸にしようと思うのではないかなと思います。

ちなみに、市長、給食費の無償化には、所得制限はありますか。

○高橋市長

ありません。私は所得制限は全て設けませんから。

○市政モニター

ないですね。そこをきちんと明確に謳っている報道は私が見たときになかったのです。これは所得制限があるとも書いていないから、では所得制限がないんだよねということでもいいのかもしれないですが、ここは発信力がちょっと弱いところかなと思います。そこはSNSでばんばんやるというのもいいと思うのですが、そういった層が、ちょっとでも水戸がよかったら、水戸を選ぶのではないのでしょうか。そういった観点から選んだ人たちが住むとなると、それは税収も増えるし、人口も増える。そういった層が結構いるのではないのでしょうか。

明石市の話でいくと、明石市がそれをやったことによって、周辺の自治体も同じような話になってくる。ただ、子育て世帯層が集まったことによって、もう一人という思いが生まれてきた。結果的に周辺人口と合わせて人口が増えました。

ただ、これには裏表があるので、結果的に神戸の人口はどんどん流出しているということもあると思います。これは消耗戦の部分というのはあるかと思うのですが、ただ、そこで何もしないで負けますか、何かして勝ち残れるように頑張りますかというところかなと思うのです。

○高橋市長

確かに、よく何とか町とか何とか村とか、人口何千人かのところが、徹底的に子育てで、あれは無料、これも無料と全部やって、確かに特殊合計出生率が2.何%になっているという例があるのはあるのです。だから、中長期的に見れば、ものを無料にする、安くするというのは少子化対策にもつながっているということなのではないでしょうか。女性の方々、いかがですか。

○市政モニター

全然違う切り口として御意見を申し上げたいのですが、私は、給食費が安くなるとか、それ自体は悪いことではないと思うのですが、果たしてそれが本当に子育て政策に自分となるのかというと、ちょっと疑問になっております。だったら、今働いていないお母さんを働かせたほうがいいと思います。お金をかけるということは、市の財政としては負担になるのは当たり前のことですが、そもそもそこにお金を使うのではなくて、市民のお金を増やすという考えもあっていいのかなと思います。給食費を安くするよりは、こどもが保育園とかに簡単に入れるような施策をつくったりとか、あとは、学童とかそういうものできちんと

子育てをできる、ここだったら長く働くことができるという、水戸市が進めている施策とは違いますが。

今、学童について思ったのは、私のこどもが、今度、小学校に上がるのですが、国立の附属の小学校に行くのですが、来年から学童がなくなりまして、ではどうするのと思っています。

○高橋市長

国立は学童がないのですか。

○市政モニター

国立の委託している学童が来年で廃止になります。ではどうすればいいか。では民間に預けてくださいということです。私はパートなので、民間に預けたら収入がゼロになります。私たちも働かないと税収が増えないというのは分かっているのですが、そういうことも、周りでお金を減らすというよりは、そういうことがあってもいいのかなとは思いました。

○高橋市長

学童は、これも私の政策の一丁目一番地で、国立ではなくて、水戸市立で申し訳ないのですが、水戸市立は1年生から6年生まで全部お預かりしています。少し環境が悪いところがあるから、そこは改善していかなければならないのですが、午後6時までだったものを6時30分までお預かりするというので、今のところ、待機児童はゼロの報告は受けているのです。国立はどうするのでしょうかね。人ごとではないですが、大変でしょう。

水戸市でも、以前は、民間の学童に補助金をあげてお願いしていたのですが、今は水戸市がほぼ100%受け入れられるので、民間に補助金をそれ以上は出していないのです。それだって、民間に預けると2万円とか3万円とかなのですよね。水戸市は4,500円ぐらいです。選択肢が1個しかないというのは大変ですよ。

水戸市は選択肢が2つですから、市のところに預ければ4,500円ですが、ただ、市よりも、こっちは英語をやっているとか、何とか遊びをやっているから民間へ行きたいというと、その人はどうぞ2万円を払ってもやってくださいとなるのです。選択肢がそもそも1つしかなくて民間に預けるしかないというのは、ちょっと国立は冷たいように感じますね。

そこで、市の学童に来てくださいと言うわけにはいかないものですから、申し訳ないのですけれども。

○市政モニター

それで、水戸市役所のほうに、こういうふうに学童がなくなりますので、民間にしか預けられないということであれば、近くの小学校にできないですかと聞いたら、できませんと言われた。

○高橋市長

すみません。あくまでも市に所属してもらわないとできないものですから、そこはすみません。

○市政モニター

さっき言っていた少子化の観点のところなのですが、働いているお母さんたちは第1子を連れて出てくるのがまず大変です。先ほど話が挙がりましてとおりの、妊娠している状態でこどもを連れていくのが大変です。ここでこんなに辛い思いをしているのだったら、もう1人

は要らないなというのが基本なのです。1人目だけでも大変なのに、妊娠して、こんなに辛い状況になってというところで、そこを助けていけるかどうかというところが、今回、私が提言に挙げたところなのですが、社会復帰に向けてといっても、皆さん、本当に情報を何も知らないのです。何も知らない。どこに聞けばいいか分からない。

市役所は、母子手帳をもらったら、もうそこから妊娠の間のお話は特には何もありません。

保育園を調べようかなと思って、そこで自分たちで聞きにいかないと分からない。

保育園の入所に当たってというところもあったのですが、そのところをもう少し間口を広げていくことによって分かりやすくなっていくとか、本当に苦労が減っていくということが、選ばれていくというところにつながっていくのではないのかなと思っています。

○高橋市長

例えば、今、私は水戸市のホームページを開いて、子育て情報だけに特化したページを見れるのですが、これで足りないところを教えてもらえますか。今は時間がないので、意見書か何かでお願いいたします。

結局、ここでいろいろ見てもらえれば、今言った産前産後から何から全部分かるようにはなっているのだけれども、これでも分かりにくいよ、これでもだめだよというのを、逆に皆さんに教えてもらったほうが、皆さんの目線でつくったほうがいいサイトができるのだと思うのです。

だから、今おっしゃったように、相談するところが分からない、保育所もどういうふうにやっていいか分からない、産前産後もどうやって助けていいか分からないというお困りの人たちが、これすら見ても分からないのかどうなのか。これをどう改善すれば皆さんが思うような分かりやすいものになっていくのかというところを逆に教えてもらえれば、そのように改善していきたいなと思っています。

今日は時間がないので、後で家でこういうものを見てもらって、こういうところをこういうふうに変更すればもっと見やすいのにな、分かるのになというところを教えていただければ、どこに相談していいか分からないとか、困ったとかということがないような形の情報発信をしていきたいなと思っています。

○市政モニター

1つだけお願いします。

学童の話です。私は、今、子どもが6歳で、4月から小学校です。保育園は、延長で7時まで預けられるのですが、学童になった途端になぜか6時半まできっかりになるのです。その30分がすごく大きいのです。

私は午後5時半が退勤時間で、勤務地が東海村なのです。東海村から水戸への6号国道がすごく混むのです。午後6時半自体が滑り込みなのですが、ただ、保育園の申請上、そこは決められているのです。

でも、午後6時半を過ぎても、連絡をして、「すみません、今日はちょっと混んでいて」とか、「ちょっと残業で」とかというところで何とか言って、午後7時ぐらいまで見てもらって、ようやく今はつないでいるのですが、何で午後6時半なのでしょう。

○高橋市長

それでもやっと30分延ばしてもらったのです。午後6時だったものを6時半にしたのです。

だから、次の段階で午後7時までにするのはちょっと待ってください。今、やっと30分延ばしてもらうことに成功しました。あとはお金の問題もあると思うのです。

○市政モニター

延長料金がかかってもいいので、午後7時までという仕組みができれば。なので、私は、高い民間に預けざるを得ないのです。

○高橋市長

ちょっと相談してみます。お金の面と、結局、今、支援員の成り手がなかなかいないという問題があるのです。だから、午後7時までできるのかどうなのか。

今はどういう状況ですか。

○こども政策課

市長がおっしゃるとおり、午後6時のところを、民間委託を始めて、6時半まで全校拡大したということです。支援員の確保とか、当然、お金の問題等ございますが、夕方の遅い時間と長期休暇中の朝の時間をもうちょっと早くしてほしいといった要望も多数受けているというのが実情でございます。

そういった御意見を参考にしながら、人の確保等も含めまして、今後、検討をしていく必要があるとは考えております。

○高橋市長

そういったお金の問題と、皆さんからいただく延長料金をどういうふうにするかと、それから、やっぱり人ですよ。人が確保できてくればいいのではないかなと思いますので、それは検討課題にさせていただきます。

○市政モニター

今、市立小学校の学童はすごくリーズナブルで、ものすごく低く抑えられて、すごくいいのですが、正直、所得によって段階的に料金を設定していただいてもいいので、午後7時まで預かれる環境をゆくゆくはぜひよろしくお願いいたします。

○高橋市長

事業者といろいろ相談して、やれるかどうか。

分かりました。預かれる時間は遅ければ遅いほどいいと思います。

話は変わりますが、魅力発信の話は、私が市長に就任して最初にやった仕事なのです。私が県会議員をやっていた頃から魅力度が最下位で、まさに発表でおっしゃったとおりなのです。

いつも言われることは、「そんなの知らなかったよ、何で教えてくれなかったんだよ」と言われるわけです。要は、普段は興味がないのだけれども、テレビとか何かで話題になると、それに興味を持ってしまったりして、実は水戸市もそういうことをやっていますよと言うと、「何でそんなの今さら言って」みたいなことを言われるので、そういうことを言われないうに何とかしようということで、みとの魅力発信課を私が平成24年につくったのです。それでSNSを活用して先進的にやってきたのですが、今はもうどこでもやるようになってしまっていて、本当に悩みです。知らなかったといまだに言われます。

イベント情報なども、今、AIが集約するやつがありますが、それも分からないのがやっぱり問題なんだ。実は、AIが全てのイベントを拾い歩いて、それを一覧表にする仕組みを

つくったのです。

そうすると、役所のイベントばかりではなくて、民間も何をやっているのかということがジャンルごとに出てくるのです。では今日はここに遊びに行こうとかとすることができるのですが、確かに水戸市のホームページを開いてもそれは出てこないのだよね。どのようにすれば見れますか。

○みとの魅力発信課

「水戸 イベント」で検索すれば一番上にくるようになっています。

○高橋市長

ただ、「水戸 イベント」で検索すればいいですよということをみんなが認識しなかったら検索はしないですよ。これは永遠の課題なのです。いろいろなツールをできれば何でもつくる。

ただ、今、皆さんに一番登録してもらいたいのは、やっている方がいらっしゃると思うのですが、市公式ラインなのです。

今、ラインは何万人ぐらい登録しているの。

○みとの魅力発信課

約6万4,500人です。

○高橋市長

27万人のうち、こどもは別としても6万人ですから、これが災害情報から主なイベント情報から何からプッシュ型でやっていくものなので、これを登録していただければ、大体主要なものは行くはずなのです。明日は何々ごみの日ですよとかいうことが行きますので、ぜひ登録していただければと思います。

まさに発表でおっしゃったとおりなのです。これは永遠の課題で、行き着くところがないのです。私たちも模索しながら、トライアンドエラーをやりながら、いろいろな手法をやっ

ていかなければならない。

一番失敗したのがクラブハウスです。今、やっている人はいるのですかね。あれでいろいろな情報発信をしようと思ったら、途中から誰もやる人がいなくなってしまうって、こんな暇なことをやっている首長がいるとかいって、マスコミでも叩かれたのですが、あれは失敗しました。あれはやらなければよかったです。1回か2回やってやめてしまいましたけれども。

いろいろなツールがあるので、とにかくいろいろなことをチャレンジしてやっていきたいと思っています。

おかげさまで、私の個人のものはアクセス数は結構いいのです。役所のほうは、今、1日どのくらいあるのですか。

○みとの魅力発信課

ホームページは月間100万回ぐらいです。

○高橋市長

月間100万回はあるのですが、ただ、行政情報なのであまり見ないでしょう。

皆さん、水戸市のホームページって見ますか。何から情報って取りますか。

また、『広報みと』って見ますか。紙ベースはまず見ないですよ。

○市政モニター

見ますが、市公式ラインがとてもよいです。

○高橋市長

『広報みと』も市公式ラインで入ってきてしまいますからね。

○市政モニター

僕が青年会議所でイベントをやったときも、市公式ラインで今週末にやりますと出た直後にすごく応募が来るのです。ラインというのは相手から投げられる、受け身でいいので、情報を得る手段としては非常にいいと思います。

○高橋市長

みとの魅力発信課長、担当として、一言お願いします。

今の発表のやつはあなた方にとって一番大事だよ。私が12年前に最初に始めたのだから。

○みとの魅力発信課

御提言いただきまして、本当にありがとうございました。

御提言にもあるように、SNSには、今、情報がすごくたくさんあふれている中で、ここで例にも挙げていただいた官僚系ユーチューバーの農水省のBUZZMAFFなどが入っていると思うのですが、たくさん情報があふれている中でも、何かはっとする驚きとか、きらりと光る何かで見ていただけるような工夫というのは常にやっていかなければならないのかなと思っています。

特に、市公式ラインなのですが、コロナ禍前は1万人以下、9,000人ぐらいだったのですが、コロナ禍を経て、情報を取るとか、生命・安全に関わる情報を扱っていく中で急成長して、今なお月間で数百とか1,000ぐらいずつ増えております。特に、今回、令和6年の年明けからは、確定申告の予約もライン上でできるようになったりして、また急増しているところです。引き続きラインを活用した情報発信も充実させていきたいと思っています。

ありがとうございました。

○高橋市長

AIを活用したイベント情報集約サイトでは、例えば、それは「音楽」と入れると、音楽のやつがばーっと民間も出るのです。ジャンルごとにも検索をすることができるのです。

あとは日付、例えば、「2月14日」と入れれば、2月14日にやるイベントがだーっと出てくるのです。AIがサイトの中から拾い歩くのです。あれは結構いいなと思っているのです。

ただ、それを知らせることが先で、それを知らないから検索しないというところがあるので、いろいろインフルエンサーを活用したり、工夫してやっていきたいと思っています。

知らなかったということをいまだに言われますので、しっかりそこをまた取り組んでいきたいと思っていますので、またいろいろ御提言いただければと思います。

○司会

ありがとうございました。

市政モニターの皆様からの発表は、以上となります。

改めまして、市政モニターの皆様、ありがとうございました。

○司会

続きまして、高橋靖水戸市長から、提言への総括の御挨拶を申し上げます。

○高橋市長

皆さん、本当にありがとうございました。

冒頭申し上げたとおり、皆様方の御意見は市民の代表者の御意見でありますので、真摯に受け止めさせていただいて、本当にできるものから、あるいは、ちょっと難しいものでも、やらない理由ばかり探しているのではなくて、前進をさせていきたいなと思っています。

ただ、ちょっと難しいものについては、お金の用意だとか、制度上の問題だとか、本当は国がやるべきものなのではないかとか、いろいろ出てくるので、そこは私も全部やります、すぐやりますという大風呂敷を広げることはできないのですが、重要なまちづくり提言として受け止めさせていただいて、施策への反映、そして、今年、令和6年4月からの第7次総合計画の推進の中にしっかり考慮させていただきたいと思っています。

少しだけお時間をいただいて、公共政策における水戸市のごみ処理行政の話をさせていただいて、皆さん自身でいろいろお考えをいただければなと思っています。

水戸市は2020年に新しい清掃工場を稼働させました。今までの施設が老朽化しまして、水戸市の下入野町のえこみっとに最新型のごみ処理施設を建設したのですが、特に分別を行うようになりました。プラスチックのごみ分別とか、あとは、今までお店のほうで拠点回収しかやっていなかったペットボトルの回収であるとか、それは今のSDGsの取組であるとか、まさに地球温暖化の対応のためのリサイクル、リデュース、リユースの推進ということでやらせていただいたのですが、やればやるほどお金がかかります。

本当はプラスチック系のごみというのは、ピットに入れたほうが、どんどん燃えて、熱量も上がるものですから、燃やしてしまったほうがいいのですが、ただ環境面においては、燃やすということは、温室効果ガスをそれだけ出すということです。また、灰がそれだけ増えれば、最終処分場の埋立て期間も短くなってしまうということなので、なるべく灰は埋めないように、燃やすごみは少なくするようということでやらせていただいているのですが、相当お金がかかるようになりました。

ただ、一方、実はあそこは発電もしているのです。3億円分、全部賄って、さらに9億円売っていますから、ある意味、12億円分の財政効果があるということなのです。これもいろいろ研修でやられたと思うのですが、一方で、経費として、今、大体33億円ぐらいがごみ処理行政にはかかっています。

皆様方からいただくごみ処理手数料、搬入するときにお金を払ってもらうのと、ごみ袋を買ってもらうときに一緒に入っているもの、それが8億3,100万円なのです。これってどうかかなということを考えています。

要は、何が言いたいかというと、そろそろ料金改定の時期に来ているのではないかなということです。45リッターの1袋をぽんと置いて、どこかに持っていってもらうことに30円が適切なのかどうなのか。30円で高いのか、安いのか。それとも、公共政策でごみ処理行政はやっているのだから、もっと安くしろというのが皆さんの本音なのか、それとも、そこに置いて、あとは自分たちは何もしなくてもやってもらっているのだから、もう少し高くてもいいのではないかなと思っていただけるのか。ごみ処理手数料についてどうしようか、その辺の

ところが、正直申し上げて、今、悩んでいます。

そういうことを市政モニターの皆様方に御提言をさせていただきます。もちろんこれは10円でも20円でも高くないほうが皆さんの本音としてはいいはずです。

ただ、私たち経営者側としては、33億円かかるものに対して、いろいろな売電収入などで何とかで稼いではいるのですが、非常に厳しい中で、今までの30円の袋を、始まって以来1回も値上げしたことがない中で、私も、このごみ処理行政が「サステナブルな」行政であるのかどうか悩んでいます。

そうかといって、値上げをすると確定したわけではありません。若い世代の皆様方に、将来的な持続可能なごみ処理行政の中で、これらのことはどうすべきなのかということもちょっと頭に入れておいていただければ有り難いなということで、数字だけお知らせさせていただきました。

市政モニターとしての業務はこれにて終了なのだと思いますが、ぜひ今回のいろいろな学びを契機に、また水戸市のほうにいろいろな御助言、アドバイスをいただければなと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本当に今日はありがとうございました。

○司会

以上をもちまして、第8回市政モニター会議を終了いたします。

皆様、1年間、本当にありがとうございました。